

41796

教科書文庫

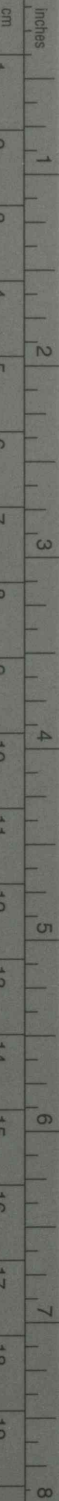
4
810
41-1944
20000 38376

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

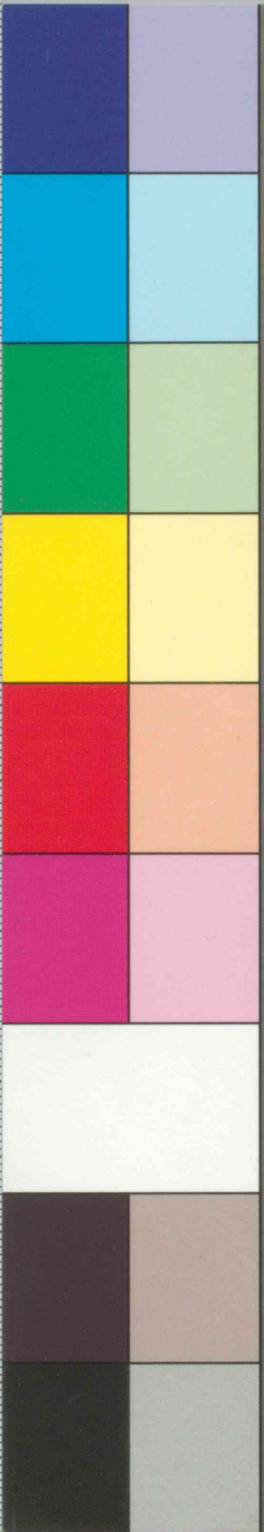
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
Mo14
資料室

中等國文 三

文部省

(11)

資料室

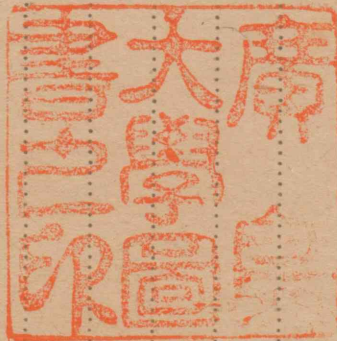
375.9
Mo/4

中等國文 三

文部省

目録

一	宇智の大野	四
二	草薙の大刀	五
三	東郷司令長官戦闘詳報	八
四	源家のほまれ	二十
五	浮島が原	四十三
六	磯もとゞろに	五十二
七	大塔宮	五十五
八	文武の道	七十一
九	乃木將軍	八十



十	心の小徑	八十五
十一	學者の苦心	九十八
十二	明治天皇御製	百三

附録

一	佐久間艇長の遺書	一
二	俳句行	十二
三	青芝の山	二十
四	ビルマ國誕生の日	三十三

一 宇智の大野

萬葉集

天皇宇智野に遊獵し給ひし時中皇命間人連老をして
獻らしめ給へる歌

やすみしし わがおほきみの 朝には 取り撫で給
ひ 夕べには いより立たしし 御執らしの 梓の
弓の 長弭の 音すなり 朝獵に 今立たすらし
夕獵に 今立たすらし 御執らしの 梓の弓の 長
弭の 音すなり

反歌

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその
草深野

二 草薙の大刀

古事記



かれ、やははえて、出雲の國の肥の河上なる鳥髮のところ
に降りましき。このをりしも、箸その河より流れ下りき。
こゝに須佐之男命、その河上に人ありけりとおもほして、まぎ上
りいでまししかば、おきなとおみなと二人ありて、をとめを中にす
ゑて泣くなり。「いましたちは誰ぞ。」と問ひたまへば、そのおきな、あ
は國つ神、大山津見神の子なり。あが名は足名椎、めが名は手名椎。
むすめが名は櫛名田比賣とまをす。とまをす。また、「いましが泣く
ゆゑは何ぞ。」と問ひたまへば、「あがむすめは、もとより八をとめあり
き。こゝに高志の八俣をろちなも、年ごとに來てくふなる。今そ
れ來ぬべき時なるが故に泣く。」とまをす。「その形はいかさまにか。」

と問ひたまへば、「それが目は赤かゝちなして、身一つに頭八つ、尾八つあり。また、その身に蘿らまた檜ひ櫛し生なひ、その長さた八谷や峽せ八尾をわたりて、その腹を見れば、ことごとくくにいつも血あえたたられたり」とまをす。

かれ、速須佐之男命はやすけのみこと、そのおきななに、「これいましのむすめならば、あれに奉らむや」とのりたまふに、「かしこけれど御名を知らず」とまをせば、「あは天照大御神のいろせなり。かれ、今天あまより降りましつ」と答へたまひき。こゝに、足名椎手名椎の神あそなすなはちのかみ、「しかまさばかしこし、奉らむ」とまをしき。かれ、速須佐之男命はやすけのみこと、すなはち、その足名椎手名椎の神あそなすなはちのかみにのりたまはく、「いしましたち、八塩折の酒を醸かみ、また垣かきを作りもとほし、その垣かきに八つの門かどを作り、門かどごとに八つのさずきを結むすひ、そのさずきごとに酒船を置きて、船ごとにその八塩折の酒を盛りて待ちてよ」とのりたまひき。

かれ、のりたまへるまゝにして、かく設たけ備へて待つ時に、かの八俣やをろち、まことに言ひしがごと來つ。すなはち、船ごとにおのおのも頭を垂れて、その酒を飲みき。こゝに、飲み酔よひて、皆伏し寝たり。すなはち、速須佐之男命はやすけのみこと、その佩たかせる十拳じゅうけん劔けんを抜き、そのをろちを切りはふりたまひしかば、肥の河、血になりて流れき。かれ、その中の尾を切りたまふ時、御刀みかたの刃やいばかけき。あやしと思ほして、御刀のさきもちて、刺し割ききてみそなはししかば、つむがりの大刀あり。かれ、この大刀を取らして、あやしき物ぞと思ほして、天照大御神にまを上げたまひき。こは草薙くさなぎの大刀なり。かれ、こゝをもて、その速須佐之男命はやすけのみこと、宮造るべきところを出雲の國にまぎたまひき。こゝに須賀すかのところところに到りましてのりたま

はく「あれこゝに來まして、あが御心すがくし」とのりたまひて、そこになも宮造りてましましける。かれ、そこをば今に須賀とぞいふ。この大神、初め須賀の宮造らしし時に、そこより雲立ちのぼりき。かれ、御歌よみしたまふ。その御歌は、

やくもたついづもやへがきつまごみにやへがきつくるそ
のやへがきを

こゝに、かの足名椎の神をめして、「いましはあが宮の首たれ」とのりたまひ、また、名を稲田宮主須賀之八耳神と負せたまひき。

三 東郷司令長官戰鬪詳報

天佑と神助により、わが聯合艦隊は、五月二十七、八日、敵の第二、第三聯合艦隊と日本海に戦ひて、遂に、殆どこれを撃滅することを得たり。

初め、敵艦隊の南洋に出現するや、上命に基づき、當隊は、あらかじめこれを近海に迎撃するの計畫を定め、朝鮮海峡に全力を集中して、徐ろに敵の北上を待ちしが、敵は一時、安南沿岸に寄泊したる後、漸次北航し來たりしを以つて、そのわが近海に到達すべき數日前より、豫定の如く、數隻の哨艦を南方警戒線に配備し、各戦列部隊は一切の戦備を整へ、直ちに出勤し得る姿勢を持して、各、その根據地に泊在せり。

果然、二十七日午前五時に至り、南方哨艦の一隻、信濃丸の無線電信は、「敵艦二〇三地點に見ゆ。敵は東水道に向かふもの如し」と警報し、全軍踴躍、直ちに發動し、各部隊は豫定の部署に準じて、對敵行動を開始せり。

午前七時、哨艦和泉もまた敵艦隊を發見して、敵既に宇久島の北西二十五哩の地點に達し、北東に航進するを報じ、第五第六戰隊、次いで第三戰隊も、午前十時十一時の交、壹岐對馬の間に於いて敵と觸接し、爾後、沖の島附近に到るまで、これらの諸隊は、時に敵の砲撃を受けしも、終始よくこれと觸接を保持し、審かに時々刻々の敵情を電報せしかば、この日海上濛氣深く、展望五哩以外に及ばざりしも、數十哩を隔つる敵影、恰も眼中に映ずるが如く、未だ敵を見ざる前、既に敵の戰列部隊はその第二第三艦隊の全力にして、特務艦船約七隻を伴ふこと、敵の陣形は二列縦陣にして、その主力は右翼列の先頭に占位し、特務艦船は後尾に續航せること、又、敵の速力は約十二哩にして、なほ北東に航進せること等を知り、本職はこれにより、わが主力を以つて、午後二時頃、沖の島附近に敵を迎へ、先づ、その左翼列の先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり。

第一第二第四戰隊及び各驅逐隊は、正午頃、既に沖の島の北方約十哩に達し、敵の左側に出でんがため、更に西方に針路を執りしが、午後一時三十分頃、第三戰隊及び第五第六戰隊等も、敵と觸接を保ちつゝ、相前後して來たり合し、一時四十五分に至り、まさにわが左舷南方約數哩にはじめて敵影を發見せり。

敵は豫期の如く、その右翼列の先頭にボロジノ型戰艦四隻の主力戰隊を置き、オスラーピヤ・シソイウエリーキー・ナワリンより成る一隊、左翼列の先頭に占位し、ニコライ二世ほか海防艦三隻より成る一隊、これに次ぎ、ジェムチウグ・イズムルードの二艦は、兩列の間に介在して、前方を警戒せるものの如く、なほその後方、濛氣の裡には、オレーグ・アウローラ以下二、三等巡洋艦の一隊、ドンスコイ・モ

ノマーフその他特務艦船等、數渚に互りて連綿續航するをほのかに認むるを得たり。

こゝに於いて、戰鬪開始を令し、一時五十五分、全軍に對し、皇國の興廢この一戰に在り。各員一層奮勵努力せよ。との信號を掲揚せり。而して、第一戰隊は少時南西に向首し、敵と反航通過すると見せしが、午後二時五分急に東に折れ、その正面を變じて斜めに敵の先頭を壓迫し、第二戰隊も續航してその後連なり、第三、第四戰隊及び第五、第六戰隊は、豫定戰策に準じ、いづれも南下して敵の後尾を衝けり。これを當日戰鬪開始の際に於ける彼我の對勢とす。

敵の先頭部隊は、第一戰隊の壓迫を受けて、やゝその右舷に轉舵し、午後二時八分、かれより發砲を開始せしが、われは暫くこれに耐へて、射距離六千メートルに入るに及び、猛烈に敵の兩先頭艦に砲火を集注せり。敵は、これがため益、東南に擊壓せらるゝもの、の如く、その左右兩列共に漸次東方に變針し、自然に不規則なる單縱陣を形成して、われと並航の姿勢を執り、その左翼列の先頭艦たりしオスラービヤの如きは、須臾にして擊破せられ、大火災を起して戰列を脱せり。

この時に當り、第二戰隊も既に悉く第一戰隊の後方に列し、わが全線の掩護砲火は、射距離の短縮と共に益、顯著なる効果を呈し、敵の旗艦スウォーロフ、二番艦アレクサンドル三世も大火災に罹りて戰列を離れ、陣形いよゝゝ亂れ、後續の諸艦また火災に罹れるもの多く、その騰煙は西風に靡きて、忽ち海上一面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包み、第一戰隊の如きは、ために一時射撃を中止せるの狀況なりき。これ、午後二時四十五分前後に於ける彼我主力の戰

況にして、勝敗は既にこの間に決せり。

わが主隊は、かくの如く敵を南方に撃壓し、煙霧の中、敵影を發見すること、緩徐にこれを砲撃しつゝ、午後三時頃には、既に敵の前路に出でて約南東に向針しつゝ、ありしが、敵は俄かに北方に向首し、わが後尾を廻りて北走せんとするが如きを以つて、われは急に反轉してその前路を扼し、再び敵を南方に撃壓し、これを猛射したれば、敵の諸艦は多大の損害を受けつゝ、混亂に陥れり。唯、この間に壯烈なる事績として特記すべきは、千早及び第五、第四の兩驅逐隊が、敵の敗艦スウォーロフに對し、勇敢なる水雷攻撃を決行したることなり。

かくて、われは洋上に離散彷徨せる敵の殘艦を搜索して、縦横にこれが撃沈につとめ、更に第三、第四、第五、第六戰隊は、豫定戰策に準じて、敵の巡洋艦及び特務部隊を迫撃しつゝ、これを撃破せるため、敵は全軍潰亂滅裂の悲境に陥りたり。この時、夕陽既に春き、わが驅逐隊艇隊は、東、南、北の三面より漸次敵に逼り、既に襲撃準備の姿勢を執れるを以つて、第一戰隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて、日没と共に東方に變針し、同時に本職は、龍田をして、全軍北航して、明朝鬱陵島に集合すべし。と電令せしめ、こゝに當日の晝戰を終結せり。

この日、朝來南西の強風浪を上ぐることに高く、夕刻に至りて風や、やはらぎしも、浪なほ靜まらず。洋中の水雷攻撃は不利少からざる狀況なりしも、各驅逐隊及び艇隊は、この千載一遇の時機を失せんことを恐れ、皆風濤を冒して日没前に來たり合し、各、先を争うて敵の周圍に蟄集し、午後十一時頃に至るまで、連続して激烈なる

肉薄襲撃を決行したり。敵は、日没より探照砲火を以つて、極力防戦せしむ、遂にわが攻撃に耐へず、僚艦相失して四分五裂の状態となり、各、血路を求めて任意に運動せしかば、わが襲撃隊の追蹙と共に、こゝに一場の大混戦を現出し、少くも敵艦三隻は、この間、わが水雷に罹りて、全くその戦闘、航海力を失ひたり。

後日、捕虜の言を聞くに、當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆ど言語に絶し、わが艦艇連続肉薄し來たるを以つて、その應接に遑なく、且つその距離餘りに近きがために、備砲俯角の度を過ぎて、照準する能はざりしといふ。

二十八日黎明、前日來の濛氣拭ふが如く、鬱陵島集合の途上にありし第五戦隊は、早くも東方に當り、敵艦の煤煙數條あるを警報せり。これ、問はずして殘敵の主力たるや明らかなり。こゝに於いて第一、第二戦隊は敵の前路を扼し、第六、第四戦隊は第五戦隊に合して敵の後方を抑へ、午前十時三十分の頃、竹島の南西約十八哩の地點に於いて敵を包围せり。もとより、敗餘の敵艦既に多大の損傷を負へるのみならず、わが優勢に抵抗し得べきにあらざれば、第一、第二戦隊が先づ砲火を開くや、須臾にして白旗を掲げ、敵艦隊司令官ネボガトフ少將はその部下と共に降意を表し、本職は、特に將校以上に帶劍を許してこれを受けたり。

驅逐艦漣及び陽炎は、午後三時三十分の頃、鬱陵島の南西約四十哩に於いて、敵の驅逐艦二隻を發見し、極力これを北西に追蹙して戦闘を開始せしに、敵の後續驅逐艦は白旗を掲げて降意を表せり。漣は、直ちにこれを捕獲せしに、この驅逐艦はベドゥイにして、敵艦隊司令長官ロジェストウエンスキー中將及びその幕僚の移乗し

をるを知り、その乗員と共にこれを捕虜とせり。聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を収むるに汲々たりし際、南方前日の戦場に於いてもまた相應なる残獲ありたり。この日早朝、戦場掃除の任務を持して出發したる特務艦は、前夜の水雷攻撃に傷つき、將に沈没せんとしつゝある敵艦を發見し、これが捕獲の手續を了して、その乗員を救助收容せり。その他麾下砲艦、特務艦等にて、戦後、戦場附近の沿岸を搜索して、救助收容し得たる撃沈敵艦の乗員少からず。戦利艦五隻の捕虜と合して、その數殆ど六千に達す。

以上は、五月二十七日午後より翌二十八日午後、に互れる海戦の經過にして、その後、當隊の一部は、なほ遠く南方に敵を搜索せしも、遂にまたその隻影を見ず。日本海を通過せんとせし敵艦隊は約三十八隻にして、わが撃滅或は捕獲に洩れたりと認むるものは、巡

洋艦驅逐艦及び特務艦各數隻に過ぎず。而して、この二日間の戦闘に於いて、わが艦隊の失ひたるところは、水雷艇三隻のみにして、その他多少の損害を被りたるものもあるも、一として今後の役務に支障あるものなし。

この對戦に於ける敵の兵力、われと大差あるにあらず、敵の將卒もまた、その祖國のために極力奮闘したるを認む。しかも、わが聯合艦隊がよく勝ちを制して前記の如き奇績を収め得たるものは、一に、天皇陛下御稜威の致すところにして、もとより人爲の能くすべきにあらず。特に、わが軍の損失、死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護によるものと信仰するの外なく、曩に敵に對し勇進敢戦したる麾下將卒も、皆この成果を見るに及んで、唯感激の極、言ふところを知らざるもの如し。(東郷聯合艦隊司令長官戰闘詳報ニ據ル)

四 源家のほまれ

平家物語

逆櫓

壽永四年正月十日の日、九郎大夫判官義經院參して、大藏卿泰經朝臣を以つて奏聞せられけるは、平家は神明にも放たれ奉り、君にも捨てられまゐらせて、帝都を出でて波の上に漂ふ落人となれり。然るを、この三箇年が間、攻め落さずして、多くの國々を塞げられぬることこそくちをしく候へ。今度、義經に於いては、鬼界高麗契丹雲の果て、海の果てまでも、平家を滅さざらん限りは皇城へ歸るべからざる由、奏聞せられたりければ、法皇大きに御感あつて、相構へて、夜を日に繼いで勝負を決すべき由、仰せ下さる。判官、宿所に歸つて、東西の侍どもに向かつて、「今度、義經こそ院宣を承り、鎌倉殿の御代官として、平家追討のために、西國へ發向すなれ。陸は駒の蹄の通はんを限り、海は櫓權の立たん所まで、攻め行くべし。それに少しも子細を存ぜん人々は、これよりとう／＼鎌倉へ下るべし。」とぞのたまひける。

さるほどに、屋島には、隙行く駒の足早くして、正月もたち、二月にもなりぬ。春の草暮れて、秋の風に驚き、秋の風止んで、また春の草にもなれり。送り迎へて既に三年になりけり。平家、讃岐の屋島へ渡り給ひて後も、東國より新手的軍兵數萬騎、都へ着いて攻め下るとも聞ゆ。又、鎮西より、臼杵、戸次、松浦、黨同心して押し渡るとも聞えけり。かれを聞き、これを聞くにも、唯、耳を驚かし、肝魂を消すより外の事ぞなき。

女院、北の政所、二位殿以下の女房たちさし集ひ給ひて、「今度、わが

方さまに、いかなる憂き事を聞き、いかなる憂き目を見んずらん」と歎き合ひ、悲しみ合はれけり。中にも、新中納言知盛の卿は、東國北國の凶徒らも、随分重恩を蒙つたりしかども、忽ちに恩を忘れ、契りを變じて、頼朝・義仲らに従ひき。まして、西國とてもさこそはあらんずらめと思ひしかば、「唯、都の内にていかにもならせ給へ」と、さも申しつるものを、わが身一つの事ならねば、心弱うあこがれ出て、今日かゝる憂き目を見るくちをしさよ」とぞのたまひける。まことに理と覺えてあはれなり。

さるほどに、二月三日の日、九郎大夫判官義經都をたちて、攝津の國渡邊・福島兩所にて舟揃へし、屋島へ既に寄せんとす。兄の三河守範頼も、同日に都をたちて、これも攝津の國神崎にて兵船揃へて、山陽道へ赴かんとす。同じき十日の日、伊勢石清水へ官幣使を立てられ、主上並びに三種の神器、事故なう都へ返し入れ奉るべき由、神祇官の官人、もろくの社司、本宮本社にて祈誓申すべき旨、仰せ下さる。同じき十六日、渡邊・福島兩所にて揃へたりける船どもの纜既に解かんとす。折節、北風木を折つて、烈しう吹いたりければ、船ども皆打ち損ぜられて、出すに及ばず、修理のために、その日は留りぬ。

さるほどに、渡邊には東國の大名、小名寄り合ひて、「そもくわれら船軍のやうは未だ調練せず、いかせん」と評定す。梶原進み出でて、「今度の船には、逆櫓を立て候はばや」と申す。判官、「逆櫓とは何ぞ。」梶原、「馬は駈けんと思へば駈け引かんと思へば引き、弓手へも馬手へも廻しや、すう候が、船はさやうの時、きつと押し廻すが大事で候へば、艦舳に櫓を立てちがへ、脇楫を入れて、どなたへも廻しや

すいやうにし候はばや」と申しければ、判官「先づ門出の悪しさよ。軍には、一引きも引かじと思ふだに、あはひ悪しければ引くは常の習ひなり。まして、さやうに逃げ設けせんになじかはよかるべき。殿ばらの船には、逆櫓をも、かへさま櫓をも、百挺、千挺も立て給へ。義経は唯もとの櫓で候はん」とのたまへば、梶原重ねて「よき大將軍と申すは、駈くべきところをも駈け、引くべきところをも引き、身を全うして敵を滅すを以つて、よき大將とはしたる候。さやうに片趣なるをば、猪武者とてよきにはせず」と申す。判官「猪鹿は知らず、軍は唯平攻めに攻めて、勝ちたるぞ心地はよき」とのたまへば、東國の大名小名、梶原に恐れて高くは笑はねども、目引き鼻引きさぶめき合へり。

その日、判官と梶原と、既に同士軍せんとす。されども、軍はなかりけり。

判官「船どもの修理して新しうなつたるに、各、一種一瓶して祝ひ給へ、殿ばら」とて、營む體にてもてなし、船に兵糧米積み、物の具入れ、馬ども立てさせ、船とう仕れ」とのたまへば、水主「櫓取ども、これは順風にては候へども、普通には少し過ぎて候。沖はさぞ吹いて候らん」と申しければ、判官大きに怒つて「海上に出で浮かうだる時、風こはければとて留るべきか。野山の末にて死に、海河に溺れて失するも、皆これ前世の宿業なり。向かひ風に渡らんと言はばこそ義経が僻事ならぬ、順風なるが普通に少し過ぎたればとて、これほどの御大事に、船仕らじとはいかでか申すぞ。船とう仕れ。仕らば、しやつばら一々に射殺せ、者ども」とぞ下知し給ひける。「承つて候」とて、伊勢の三郎義盛、奥州の佐藤三郎兵衛、信同じき四郎兵衛

忠信江田の源三熊井の太郎武藏坊辨慶などいふ一人當千の兵ども、御説であるぞ。船とう仕れ。仕らずば、おのればら一々に射殺さん。とて、片手矢はげて馳せ廻る間、水主楳取ども、こゝにて射殺されんも同じこと、風こはくば、沖にて馳せ死にも死ねや者ども。とて、二百餘艘が中よりも、唯五艘出でてぞ走りける。

五艘の船と申すは、先づ判官の船、次に田代の冠者の船、後藤兵衛父子金子兄弟、淀の江内忠俊とて、船奉行の乗つたる船なりけり。残りの船は、梶原に恐るゝか、風におづるかして出でざりけり。

判官、人の出でねばとて留るべきにあらず。常の時は敵も恐れ、て用心すらん。かゝる大風大波に、思ひも寄らぬ所へ寄せてこそ、思ふ敵をば討たんずれ。とぞのたまひける。判官、各の船に篝などもいそ。火かず多う見えば、敵も恐れ用心してんずぞ。義經が船を本船として、艫舳の篝をまもれ。とて、夜もすがら渡るほどに、三日に渡るところを、唯三時ばかりにぞ走りける。二月十六日の丑の刻に、攝津の國渡邊福島を出でて、明くる卯の刻には、阿波の地へこそ吹きつけけれ。

繼信の最期

大臣殿、侍どもに、源氏が勢はいかほどあるぞ。と問ひ給へば、七、八十騎にはよも過ぎ候はじ。あな心憂や、髪の筋を一筋づつ分けて取るとも、この勢には足るまじかりつるものを、中にも取り籠めて討たずして、あわてて船に乗つたることこそくちをしけれ。能登殿はおはせぬか。陸に上つて一軍し給へかし。とのたまへば、承り候。とて、越中の次郎兵衛盛嗣を先として、都合五百餘人、小船に乗り、焼き拂ひたる總門の前の汀に押し寄せて、陣を取る。判官も八十

餘騎、矢頃に寄せて控へたり。

平家の方より、越中の次郎兵衛船の屋形に進み出で、大音聲を揚げて、そもく以前名乗り給ひつるとは聞きつれども、海上遙かに隔たつて、その假名、實名、分明ならず。今日の源氏の大將軍は誰人にてましますぞ。名乗り給へ。と言ひければ、伊勢の三郎進み出でて、あな事も愚かや、清和天皇に十代の後胤鎌倉殿の御弟、大夫判官殿ぞかし。盛嗣聞いて、さる事あり。去んぬる平治の合戦に、父討たれて孤子にてありしが、鞍馬の兒して、後には金商人の所従となり、糧料背負うて奥の方へ落ち下りしその小冠者めがことか。とぞ言ひける。義盛歩ませ寄つて、舌の柔かなるまゝに、君の御事を申しそ。さ言ふわ人どもこそ、北國礪並山の軍に打ち負け、からき命生きつゝ、北陸道にさまよひ、乞食して上つたりしその人か。とぞ言ひける。盛嗣重ねて、君の御恩に飽き満ちて、何の不足あつてか乞食をばすべき。さ言ふわ人どもこそ、伊勢の國鈴鹿山にて山だし、妻子をもはぐくみ、わが身も所従も過ぎけるとは聞きしか。と言ひければ、金子十郎進み出でて、せんない殿ばらの雑言かな。われも人も、虚言いひつけ雑言せんに、誰かは劣るべき。去年の春、攝津の國一の谷にて、武藏相模の若殿ばらの手並みのほどをば見てんものを。と言ふところに、弟の餘一そばにありけるが、言はせも果てず、十二束三伏せ取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。次郎兵衛が鎧の胸板に、裏かくほどにぞ立つたりける。さてこそ互の詞戦は止みにけれ。

能登殿、船軍はやうあるものぞ。とて、鎧直垂をば着給はず、唐卷染めの小袖に、唐綾緘の鎧着て、いか物作りの太刀を佩き、二十四差い

たるたかうすべうの矢負ひ、滋籐の弓を持ち給へり。皇城一の強弓精兵なりければ、能登殿の矢先に廻る者、一人も射落されずといふことなし。中にも、源氏の大將軍九郎義經を、唯一矢に射落さんとねらはれけれども、源氏の方にも心得て、伊勢の三郎義盛、奥州の佐藤三郎兵衛、同じき四郎兵衛忠信、江田の源三熊井の太郎武藏坊辨慶などいふ一人當千の兵ども、馬の頭を一面に立て並べて、大將軍の矢面に馳せ塞がりければ、能登殿も力及び給はず。能登殿、そこ退き候へ、矢面の雜人ばらとて、差し詰め引き詰め、さんくんに射給へば、やにはに鎧武者十騎ばかり射落さる。中にも、眞先に進んだる奥州の佐藤三郎兵衛、繼信は、弓手の肩より馬手の脇へつと射抜かれて、しばしもたまらず、馬より逆さまにどうと落つ。

能登殿の童に菊王丸といふ大力の剛の者、萌黄緘の腹巻に、三枚兜の緒を締め、打ち物の鞆をはづいて、繼信が首を取らんととんでかゝるを、忠信そばにありけるが、兄が首を取らせじと、よつびいてひやうと放つ。菊王丸が草摺のはづれを、そなたへつと射抜かれて、犬居に倒れぬ。能登殿これを見給ひて、左の手には弓を持ちながら、右の手にて菊王丸をつかんで、船へからりと投げ入れ給ふ。敵に首は取られねども、痛手なれば死ににけり。この童と申すは、もとは越前三位通盛の卿の童なり。然るを、三位討たれ給ひて後、弟能登殿にぞ使はれける。生年十八歳とぞ聞えし。能登殿この童を討たせて、餘りにあはれに思はれければ、その後は軍をもし給はず。

判官は繼信を陣の後へ昇き入れさせ、急ぎ馬よりとんで下り、手を取つて、いかゞ覺ゆる三郎兵衛とのたまへば、今はかうにこそ候

へ。「この世に思ひ置く事はなきか。とのたまへば、別に何事をか思ひ置き候べき。さは候へども、君の御世にわたらせ給ふを見まゐらせずして、死に候こそ心に懸り候へ。さ候はでは、弓箭取りは、敵の矢に當つて死ぬること、もとより期するところこそ候へ。なかんづく源平の御合戦に、奥州の佐藤三郎兵衛繼信といひけん者、讃岐の國屋島の磯にて、主の御命に代つて討たれたりなど、末代までの物語に申されんこそ、今生の面目、冥途の思ひ出にて候へ。」とて、唯弱りにぞ弱りける。判官は猛き武士なれども、餘りにあはれに思ひ給ひて、鎧の袖を顔に押し當てて、さめくとぞ泣かれける。「もしこのあたりに尊き僧やある。」とて、尋ね出させ、手負ひの唯今死に候に、「一日經書いて弔ひ給へ。」とて、黒き馬の太う逞しきによい鞍置いて、かの僧にぞ賜びにける。一の谷の後、鶴越をもこの馬にてぞ落されける。弟忠信を始めとして、これを見る侍ども皆涙を流して、「この君の御ために命を失はんことは、全く露塵ほども惜しからず。」とぞ申しける。

屋 島

さるほどに、阿波讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの嶺、こゝの洞より、十四、五騎、二十騎、打ち連れ打ち連れ馳せ來たるほどに、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引き退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向かつて漕ぎ寄せ、渚より七、八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。あれはいかにと見るところに、船の中より、年の齡十八、九ばかりなる女房の、柳の五衣に、紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを、船のせがひに挟み立て、陸へ向

かつてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに。」とのたまへば、「射よとこそ候らめ。但し、大將軍の矢面に進んで御覽ぜられんところを、手だれにねらうて、射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候らん。」と申しければ、判官、御方に射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば、「手だれども多う候中に、下野の國の住人、那須太郎資高が子に、餘一宗高こそ、小兵では候へども、手はきいて候。」と申す。判官、「證據があるか。」「さん候。かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官、「さらば餘一呼べ。」とて召されけり。

餘一、その頃は二十ばかりの男なり。裾すそに赤地の錦を以つて、おほくび、はた袖いろへたる直垂に、萌黄緘の鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割り合はせてはいだりける、ぬための鏑かぶとをぞ差し添へたる。滋藤の弓脇に挟み、兜をば脱いで高紐に掛け、判官の御前に畏まる。判官、「いかに餘一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。」とのたまへば、餘一、「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き御方の御弓箭の瑕きずにて候べし。一定仕らうずる仁に仰せつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官、大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向かはんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも子細を存ぜん人々は、これよりとうく、鎌倉へ歸らるべし。」とぞのたまひける。

餘一、重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけん、「さ候はば、はづれんをば存じ候はず、御諚で候へば、仕つてこそみ候はめ。」とて、御前を

罷り立ち、黒き馬の太う逞しきに、まろほや摺つたる金覆輪の鞍置
いて乗つたりけるが、弓取り直し、手綱かい繰つて、汀へ向かつてぞ
歩ませける。御方の兵ども、餘一が後を遙かに見送つて、「この若者
一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給
ひける。矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり打ち入れたり
けれども、なほ扇のあはひは、七段ばかりもあるらんとこそ見えた
りけれ。

頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹
きければ、磯打つ波も高かりけり。船は揺り上げ揺り据ゑ、漂へば、
扇も串に定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて
見物す。陸には源氏轡を並べてこれを見る。いづれもいづれも
晴ならずといふことなし。

餘一、目を塞いで、「南無八幡大菩薩、別してわが國の神明、日光權現
宇都宮那須湯泉大明神、願はくは、あの扇の真中射させて賜はせ給
へ。」これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二たび
面を向かふべからず。今一たび本國へ歸さんと思し召さば、この
矢はづさせ給ふな。」と、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少
し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

餘一、鏑を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふ條、
十二束三伏せ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、あやまたず
扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ
入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉み二揉み揉まれて、
海へさつとぞ散つたりける。夕日の輝いたるに、皆紅の扇の日出
したるが、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家

舷をたゝいて感じたり、陸には源氏船をたゝいてどよめきけり。

餘りのおもしろさに、感に堪へずや思ひけん、船の中より年の齡五十ばかりなる男の、黒革緘の鎧着たるが、白柄の長刀杖に突き、扇立てたる所に立つて舞ひすましたり。伊勢の三郎義盛、餘一が後に歩ませ寄つて、「御誂であるぞ。これをもまた仕れ。」と言ひければ、餘一今度は中差し取つて番ひ、よつひいてひやうと放つ。舞ひすましたる男の眞直中を、ひやうづばと射て、船底へ眞逆さまに射倒す。「あゝ、射たり。」といふ者もあり、「いやゝゝ、情なし。」といふ者も多かりけり。平家の方には、靜まり返つて音もせず、源氏はまた船をたたいとどよめきけり。

平家これを本意なしとや思ひけん、弓持つて一人、楯突いて一人、長刀持つて一人、武者三人渚にাগり、源氏こゝを寄せよや。」とぞ招きける。判官、安からぬことなり。馬づよならん若黨ども、馳せ寄せて、蹴散らせ。とのたまへば、武藏の國の住人、美尾の屋の十郎、同じき四郎、同じき藤七、上野の國の住人、丹生の四郎、信濃の國の住人、木曾の中次、五騎連れてをめて駈く。先づ、楯の蔭より、塗籠に、黒ほろはいだる大の矢を持つて、眞先に進んだる美尾の屋の十郎が馬の左の胸懸盡くしを、箭の隠るゝほどにぞ射込うだる。屏風を返すやうに、馬はどうと倒るれば、主は弓手の足を越え、馬手の方へ下り立つて、やがて太刀をぞ抜いたりける。又、楯の蔭より、大長刀打ち振つてかゝりければ、美尾の屋の十郎、小太刀、大長刀にかなはじとや思ひけん、かい伏いて逃げければ、やがて續いて追つかけたり。長刀にて薙がんずるかと思つて見ると、さはなくして、長刀をば弓

手の脇にかい挟み、馬手の手を差し延べて、美尾の屋の十郎が兜の
鍔をつかまうとす。つかまれじと逃ぐる。三度つかみはづいて、
四度のたびむずとつかむ。しばしぞたまつて見えし。鉢附けの
板より、ふつと引き切つてぞ逃げたりける。残りの四騎は、馬を惜
しうてかゝらず、見物してぞゐたりける。美尾の屋の十郎は、御方
の馬の蔭に逃げ入つて、息つきゐたり。敵は追うても來ず、その後
兜の鍔をば長刀の先に貫ぬき、高く差し上げ、大音聲を揚げて、遠か
らん者は音にも聞け、近くば目にも見給へ。これこそ京童の呼ぶ
なる上總かみの悪七兵衛景清よ」と名乗り捨てて、御方の楯の蔭へぞ退
きにける。

平家これに少しこゝちを直いて、「悪七兵衛討たすな、者ども。景
清討たすな、續けや」とて、二百餘人渚にাগり、楯を雌羽めんどりばに突き並べ、

「源氏こゝを寄せよや」とぞ招いたる。判官、安からぬことなり」とて、
田代の冠者を前に立て、後藤兵衛父子、金子兄弟を弓手、馬手になし、
伊勢の三郎を後として、判官八十餘騎をめて先を駈け給へば、平
家の方には馬に乗つたる勢は少し、大略歩おほ武者むしやなりければ、馬に當
てられじとや思ひけん、しばしもたまらず引き退き、皆船にぞ乗り
にける。楯は算を散らしたるやうに、さんぐに蹴散らさる。源
氏、勝つに乗つて、馬の太腹つかるほどに打ち入れ、打ち入れ攻め戦
ふ。船の中より熊手、薙鎌を以つて、判官の兜の鍔に、からりくと
打ち掛け、打ち掛け、二、三度しけれども、御方の兵ども太刀、長刀の先
にて、打ち拂ひ、打ち拂ひ攻め戦ふ。

されども、いかゞはしたりけん、判官、弓を取り落されぬ。うつ伏
して、鞭を以つてかき寄せ、取らんくとし給へば、御方の兵ども、唯、

捨てさせ給へ、捨てさせ給へ。」と申しけれども、遂に取つて、笑つてぞ歸られける。おとなどもは、皆爪弾きをして、たとひ千匹、萬匹に代へさせ給ふべき御たらしなりと申すとも、いかでか御命には代へさせ給ふべき。」と申しければ、判官、弓の惜しさにも取らばこそ。義經が弓といはば、二人しても張り、もしは三人しても張り、叔父爲朝などが弓のやうならば、わざとも落いて取らすべし。尪弱たる弓を敵の取り持ちて、これこそ源氏の大將軍九郎義經か弓よ。など嘲弄せられんがくちをしさに、命に代へて取つたるぞかし。」とのたまへば、皆またこれをぞ感じける。

一日戦ひ暮し、夜に入りければ、平家の船は沖に浮かび、源氏は陸に打ちあがつて、牟禮、高松の中なる野山に陣をぞ取つたりける。源氏の兵どもは、この三日が間は寝ざりけり。一昨日、攝津の國渡

邊、福島を出づるとて、大風大波に揺られてまどろまず、昨日、阿波の國勝浦に着いて軍し、よもすがら中山越え、今日また一日戦ひ暮したりければ、人も馬も皆疲れ果てて、或は兜を枕にし、或は鎧の袖籠などを枕として、前後も知らずぞ臥しにける。されども、その中に判官と伊勢の三郎は寝ざりけり。判官は高き所に打ちあがつて、敵や寄すると遠見し給ふ。伊勢の三郎はくぼき所に隠れみて、敵寄せば、先づ馬の太腹射んとて待ちかけたり。

五 浮島が原

義經記

さるほどに、佐殿の旗擧げ奥州に聞えければ、御弟九郎義經、本吉の冠者泰衡を召して、秀衡に仰せけるは、兵衛佐殿こそ旗擧げして、八箇國を打ち従へ、平家を攻めんとて都へ上り給ふと承りて候へ。

義經かくて候こそ心苦しう候へば、追ひつき奉りて、一方の大將軍をも望まばや。とぞ仰せられける。秀衡申しけるは、今まで君の思し召し立たぬ御事こそ僻事にて候へ。とて、泉の冠者を呼びて、關東に事出で來、源氏打ち出で給ふなり。兩國の兵ども催せ。とぞ申しける。御曹司仰せられけるは、千騎、萬騎も具足したく候へども、事延びてはかなふまじ。とて、打ち出で給ふ。取り敢へざりければ、先づ、かつと、三百餘騎をぞ奉りける。

御曹司の郎等には、西塔の武藏坊、又、園城寺の法師の尋ねて参りたる常陸坊、伊勢の三郎、佐藤三郎、繼信、同じき四郎忠信、これらを先として、三百餘騎、馬の腹筋馳せ切り、脛碎くるをも知らず、揉みに揉うで馳せ上る。阿津賀志の中山馳せ越えて、安達の大城戸打ち通り、行方の原過ぐるとて、勢こそまばらになりたるぞ。と仰せられけるに、或は馬の爪缺かせ、或は脛を馳せ碎きて、少々道に留り、これまでは百五十騎御座候。と申しければ、百騎が十騎にならんまでも、打てや者ども、後を顧みるべからず。とて、とゞろ驅けにて歩ませける。きつ川を打ち過ぎて、下橋の宿に着いて、馬を休ませて、絹河の渡りして、宇都宮の大明神伏し拜みまゐらせ、室の八島をよそに見て、武藏の國足立の郡、こかは口に着き給ふ。御曹司の御勢は、八十五騎にぞなりにける。板橋に馳せ着きて、兵衛佐殿は、と問ひ給へば、一昨日こゝを立たせ給ひて候。と申す。武藏の國府の六所の町に着いて、佐殿は、と仰せければ、一昨日通らせ給ひて候。相模の平塚に。とぞ申しける。平塚に着いて聞き給へば、はや足柄を越え給ひぬ。とぞ聞えける。いとゞ心もとなくて、駒を早めて打ち給ひけるほどに、足柄山打ち越えて、伊豆の國府に着き給ふ。佐殿は昨日こゝ

を立ち給ひて、駿河の國千本の松原、浮島が原に。」と申しければ、さては程近しとて、駒を早めてぞ急がれける。

九郎御曹司、浮島が原に着き給ひ、兵衛佐殿の陣の前、三町ばかり引き退いて陣を取り、暫く息をぞ休められける。佐殿、これを御覽じて、「こゝに白旗、白印にて、清げなる武者五、六十騎ばかり見えたるは、誰なるらん、おぼつかなし。信濃の人々は、木曾に従ひて留りぬ。甲斐の殿ばらは二陣なり。いかなる人ぞ、本名を尋ねて参れ。」とて、堀の彌太郎御使に遣され、家の子郎等あまた引き具して参る。間を隔てて、彌太郎一騎進み出で申しけるは、「こゝに白印にておはしまし候は、誰人にてわたらせ給ひ候ぞ。本名を確かに承り候へと、鎌倉殿の仰せにて候。」と申しければ、その中に、二十四、五ばかりなる男の色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の裾金物打

つたるを着、白星の五枚兜に、鍬形打ちて猪頸に着、大中黒の矢負ひ、滋籐の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗りたるが、歩ませ出でて、「鎌倉殿も知らし召されて候。」童名牛若と申し候ひしが、近年、奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御旗擧げの由承り、夜を日に繼ぎて馳せ参じて候。見参に入れて賜ひ候へ。」と仰せられければ、堀の彌太郎、さては御兄弟にてましましけりと、馬よりとんで下り、御曹司の乳母子、佐藤三郎を呼び出して色代あり。彌太郎一町ばかり馬を引かせけり。かくて、佐殿の御前に参り、この由を申しければ、佐殿は善悪に騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外にうれしげにて、「さらば、これへおはしまし候へ。見参せん。」とのたまへば、彌太郎やがて参り、御曹司にこの由を申す。御曹司も大きに悦び、急ぎ参り給ふ。佐藤三郎同じき四郎伊勢の三郎、これら三騎召し連

れて参らる。

佐殿御陣と申すは、大幕百八十張引きたりければ、その内は八箇國の大名小名並みありたり。各敷皮にてぞありける。佐殿御座敷には疊一疊敷きたれども、佐殿も敷皮にぞおはしける。御曹司は兜を脱ぎて童に着せ、弓取り直して、幕の際に畏まりてぞおはしける。その時、佐殿敷皮を去り、わが身は疊にぞ直られける。「それへ、それへ。」とぞ仰せらる。御曹司暫く辭退して、敷皮にぞ直られける。佐殿御曹司をつくと、と御覽じて、先づ涙にぞ咽ばれける。御曹司も共に涙に咽び給ふ。互に心のゆくほど泣きて後、佐殿涙を抑へて、さても頭の殿におくれ奉りて、その後は御行くへを承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝池の尼のなだめられしによりて、伊豆の配所にて伊東北條に守護せられ、心に任せぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向の由は、かすかに承りて候ひしかども、音づれだにも申さず候。兄弟ありと思し召し忘れ候はで、取り敢へず御上り候事、申し盡くしが、たく悦び入り候。これ御覽候へ。かゝる大事をこそ思ひ企て候へ。八箇國の人人を始めとして候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合はする人もなし。皆平家に相従ひたる人々なれば、頼朝が弱氣をまもり給ふらんと思へば、夜も夜もすがら平家の事のみ思ひ、又、或る時は、平家の討手上せば、やと思へども、身は一人なり、頼朝自身進み候へば、東國おぼつかなし。代官上せんとすれば、心安き兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひがたし。今、御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭の殿の生き返らせ給ひたるやうにこそ存じ候へ。われ

らが先祖八幡殿の後三年の合戦に桃生の城を攻められしに、多勢皆滅されて、無勢になりて、厨川の端におり下りて、幣帛を捧げ、皇城を伏し拜み、「南無八幡大菩薩、御擁護を改めず、今度の壽命を助けて、本意を遂げさせて賜べ。」と祈誓せられければ、まことに八幡大菩薩の感應にやありけん、都におはする御弟刑部丞は、内裏に候ひけるが、俄かに内裏を紛れ出て、奥州のおぼつかなきとて、二百餘騎にて下られける、路次にて勢打ち加り、三千餘騎にて厨川に馳せ來て、八幡殿と一つになりて、遂に奥州を従へ給ひけるその時の御心も、頼朝御邊を待ち得まゐらせたる心に、いかでかまさるべき。今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂の憤りを休めんとは思し召されずや。御同心も候はば、もつとも然るべし。とのたまひも敢へず、涙を流し給ひけり。御曹司とかくの返事もなくして、袂をぞ絞られける。これを見て、大名小名、互の心の中推し量られて、皆袖をぞ濡しける。

暫くありて、御曹司申されけるは、仰せの如く、幼少の時、御目にかかりて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時、鞍馬へ參り、十六まで形の如く、學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々、平家方便を作る由承り候ひし間、奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御旗擧げの由承りて、取り敢へず馳せ參る。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見參に入り候心地してこそ存じ候へ。命をば故頭の殿にまゐらせ候。身をば君にまゐらす上は、いかゞ仰せに従ひまゐらせ候べき。と申しも敢へず、また涙を流し給ひけるこそあはれなれ。さてこそ、この御曹司を大將軍にて上せ給ひけり。

六 磯もとゞろに

源 實 朝

菖 蒲

五月雨に水まさるらし菖蒲草うれ葉かくれて刈る人
ぞなき

蟬の鳴くを聞きて

吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋
は來にけり

秋の歌

天の原ふりさけ見れば月清み秋の夜いたくふけにけ
るかな

冬の歌

木の葉散り秋も暮れにしかた岡のさびしき森に冬は
來にけり

霰

ものゝふの矢なみつくるふこての上に霰たばしる那
須の篠原

雪

夕さればしほ風さむし波間より見ゆる小島に雪はふ
りつゝ

あら磯に波の寄るを見てよめる

大海の磯もとゞろに寄する波われてくだけてさけて
散るかも

道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣く

をそのあたりの人に尋ねしかば父母なむ身ま
かりにしと答へはべりしを聞きて

いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母を
尋ぬる

建暦元年七月洪水漫天土民愁歎せんことを思

ひて一人本尊に向かひ奉り聊か祈念を致す

時により過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめた
まへ

太上天皇御書を下し預りける時の歌

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあ
らめやも

七 大塔宮

太平記

柿の衣

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞し召されんために暫く
南都の般若寺に忍んで御座ありけるが笠置の城既に落ちて主上
とらはれさせ給ひぬと聞えしかば虎の尾を踏む恐れ御身の上に
迫りて天地廣しといへども御身を隠さるべき所なし。日月明ら
かなりといへども長夜に迷へる心地して晝は野原の草に隠れて
露に臥す鶉の床に御涙を争ひ夜は孤村の辻に佇みて人を答むる
里の犬に御心を惱まされいづくとも御心安かるべき所なかり
ければかくてもしばしはと思し召されけるところに一乗院の候
人按察法眼好專いかにして聞きたりけん五百餘騎を率して未明

に般若寺へぞ寄せたりける。

折節宮に附き奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく兵既に寺内に打ち入りたれば、紛れて御出であるべき方もなし。さらばよし、自害せんと思し召して、既に押し肌脱がせ給ひたりけるが、事かなはざらん期に臨んで腹を切らんことはいとやすかるべし。もしやと隠れて見ばやと思し召し返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋を開けず、一つの櫃は御經を半ば過ぎ取り出して、蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃の中へ御身をしまめて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隱形おんぎようの呪じゆを御心の中に唱へてぞおはしける。もし搜し出されば、やがて突き立てんと思し召して、氷の如くなる

刀を抜いて御腹にさし當てて、兵、こゝにこそ。と言はんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るもなほ淺かるべし。

さるほどに、兵、佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上までも残る所なく搜しけるが、餘りに求めかねて、これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よ。とて、蓋したる櫃二つを開いて、御經を取り出し、底を覗して見けれども、おはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなし。とて、兵、皆寺中を出て去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、もしまた兵立ち歸り、委しく搜すこともやあらんずらんと御思案あつて、やがて、先に兵の搜し見たりつる櫃に入り替らせ給ひてぞおはしける。案の如く、兵どもまた佛殿に立ち歸り、先に蓋の開きたるを見ざりつるがおほつかなし。とて、御經を皆打ち移して見けるが、

からくと打ち笑うて、大般若の櫃の中をよくく、捜したれば、大塔宮はいらせ給はて、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なりと、信心肝に銘じ、感涙御袖をうるほせり。

かくては、南都邊の御隠れ家もかなひがたければ、即ち般若寺を御出でありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林房玄尊、赤松律師、則祐木寺相模、岡本三河房、武藏房、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、かれこれ以上九人なり。宮を始め奉りて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、そのうちに年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君もとより龍樓鳳闕のうち人にとならせ給

ひて、華軒香車のほかを出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は、定めてかなはせ給はじと、御供の人々、かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる踏皮脚巾草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤め、怠らせ給はざりければ、路次にて行き逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むることなかりけり。

由良の港を見渡せば、沖漕ぐ舟の楫をたえ、浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松に懸れる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に磨ける玉津島、光も今は更でだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習ひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。その夜は、叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給

ひけるは、南無歸命頂禮三所權現、滿山護法十萬の眷屬、八萬の金剛童子、垂跡和光の月明らかに、分段同居の闇を照らし、逆臣忽ちに亡びて、朝廷再び輝くことを得せしめ給へ。傳へ承る兩所權現は、これ伊弉諾伊弉冉の應作なり。わが君、その苗裔として、今朝日忽ちに浮雲のために隠されて冥闇たり。豈傷まざらんや。玄鑿空しきに似たり。神もし神たらば、君なんぞ君たらざらん」と、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤め、感應などかあらざらんと、神慮も暗にはかられたり。

夜もすがらの禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕とし、暫く御まどろみありける御夢に、鬢結ひたる童子一人來たつて、熊野三山の間は、なほも人の心不和にして、大義成りがたし。これより十津川の方へ御渡り候うて、時の到らんを御待ち候へかし。兩所

權現より案内者につけまゐらせられて候へば、御道しるべ仕るべく候。と申すと御覽ぜられ、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告げなりけりと、頼もしく思し召されければ、未明に御悦びの奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分け入らせ給ひける。

その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕をそばだて、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣をうるほす。見土ぐれば、萬仞の青壁劍に削り、見おろせば、千丈の碧潭藍に染めり。數日の間、かゝる嶮難を経させ給へば、御身もくたびれ果てて、流るゝ汗水の如し。御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御供の人々も、その身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はかしくも歩み得ざりけれども、御腰を押し、御手を引

いて、路のほど十三日に、十津川へぞ着かせ給ひける。

緋緘の鎧

元弘三年正月十六日、二階堂出羽入道道蘊、六萬餘騎の勢にて、大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押し寄する。榮摘川の川淀より城の方を見上げたれば、峯には白旗赤旗錦の御旗、深山嵐に吹き靡かされて、雲か花かと怪しまる。麓には數千の官軍冑の星を輝かし、鎧の袖を連ねて、錦繡を布ける地の如し。峯高うして道細く、山けはしうして苔なめらかなり。されば、幾十萬騎の勢にて攻むるとも、たやすく落すべしとは見えざりけり。

同じき十八日の卯の刻より、兩陣互に矢合はせして、入れ替へ入れ替へ、攻め戦ふ。官軍は物馴れたる案内者どもなれば、こゝのつまり、かしこの難所に走り散つて、詰め合はせ開き合はせ、さんぐに射る。寄せ手は死生不知の坂東武士なれば、親子討たるれども顧みず、主従亡ぶれども物の數ともせず、乗り越え、乗り越え、攻め近づく。夜晝七日が間、息をもつがず相戦ふに、城中の勢三百餘人討たれければ、寄せ手も八百餘人討たれにけり。況んや、矢に當り、石に打たれ、生死の間を知らざる者は、幾千萬といふ數を知らず。されども、城の體少しも弱らねば、寄せ手の兵、多くは退屈してぞ見えたりける。

こゝに、この山の案内者として、一方へ向けられたりける吉野の執行岩菊丸、己が手の者を呼び寄せて申しけるは、東條の大將金澤右馬助殿は、既に赤坂城を攻め落して、金剛山に向かはれたりと聞ゆ。當山のこと、われら案内者たるによつて、一方を承つて向かひたるかひもなく、攻め落さで數日を送ることこそ遺恨なれ。つらく

事のやうを案ずるに、この城を大手より攻めば、人のみ討たれて、落すことありがたし。推量するに、城の後の山、金峯山には、けはしきを頼んで、敵さまで勢を置きたることあらじと覺ゆるぞ。物馴れたらんずる足輕の兵、百五十人すぐつて歩立ちになし、夜に紛れて、金峯山より忍び入り、愛染寶塔の上にて夜のほのぼのと明け果てん時、鬨の聲を揚げよ。城の兵、鬨の聲に驚いて度を失はん時、大手搦め手三方より攻め上つて、城を追ひ落し、宮を生け捕り奉るべし。とぞ下知しける。さらばとて、案内知りたる兵百五十人をすぐつて、その日の暮ほどより金峯山へ廻して、岩を傳ひ谷を登るに、案の如く、山のけはしきを頼みけるにや、唯、こゝかしこの梢に旗ばかりを結びつけ置き、防ぐべき兵一人もなし。百餘人の兵ども、思ひのまゝに忍び入つて、木の下、岩の陰に弓矢を伏せて、胃を枕にして、

夜の明くるをぞ待ちたりける。合圖の頃にもなりにければ、大手五萬餘騎、三方より押し寄せて攻め上る。吉野の大衆五百餘人、攻め口に下り合つて防ぎ戦ふ。寄せ手も城の内も、互に命を惜しまず、追ひ上せ追ひ下し、火を散らしてぞ戦ひたる。かゝるところに、金峯山より廻りたる搦め手の兵百五十人、愛染寶塔よりおり下つて、在々所々に火をかけて、鬨の聲をぞ揚げたりける。吉野の大衆、前後の敵を防ぎかねて、或はみづから腹をかき切つて、猛火の中へ走り入つて死ぬるもあり、或は向かふ敵に引つ組んで、刺し違へて共に死ぬるもあり。思ひくゝに討死をしけるほどに、大手の堀一重は、死人に埋りて平地になる。

さるほどに、搦め手の兵、思ひも寄らず、勝手明神の前より押し寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つてかゝりける間、大塔宮、今は

通れぬところなりと思し召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋緘の鎧のまだ巳の刻なるを隙間もなく召され、龍頭の冑の緒を締め、三尺五寸の小長刀を脇にさし挟み、劣らぬ兵二十餘人、前後左右に立ち、敵の群がつて控へたる中へ走りかゝり、東西を拂ひ、南北へ追ひ廻し、黒煙を立てて切つて廻らせ給ふに、寄せ手大勢なりといへども、僅かの小勢に切り立てられ、木の葉の風に散る如く、四方の谷へさつと退く。

敵退けば、宮は藏王堂の大庭に並みゐさせ給ひて、大幕打ち上げて、最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つところの矢七筋、御頬先二の御腕、二箇所突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の如し。然れども、立ちたる矢をも抜き給はず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上立らながら、大盃を三たび傾けさせ給へば、木寺相模、四尺三寸の太刀の鋒に敵の首を刺し貫ぬいて、宮の御前に畏まり、戈鋌、劔戟を降らすこと、電光の如くなり。磐石岩を飛ばすこと、春の雨に相同じ。然りとはいへども、天帝の身には近づかて、修羅かれがため破らるゝと、はやしを揚げて舞ひたりける。

大手の合戦急なりと覺えて、敵御方の鬨の聲相交はりて聞えけるが、げにもその戦にみづから相當ること多かりけりと見えて、村上彦四郎義光鎧に立つところの矢十六筋、枯野に残る冬草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に參つて申しけるは、大手の一の木戸、いふがひなく攻め破られつる間、二の木戸に支へて數刻相戦ひ候ひつるところに、御所中の御酒宴の聲すさまじく聞え候ひつるについて參つて候。敵既にかさに取り上げて、御方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てんこと、今はかなはじと覺え

候。未だ敵の勢をよそに廻し候はぬ前に、一方より打ち破つて、一先づ落ちて御覽あるべしと存じ候。但し、跡に残り留つて戦ふ兵なくば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵いづくまでも續きて追つかけまゐらせんと覺え候へば、恐れあることにて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と、御物の具とを下し賜はつて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代りまゐらせ候はん」と申しければ、宮、「いかでさる事あるべき。死なば一所にてこそともかくもならぬ。」と仰せられけるを、義光言葉を荒らかにして、「かゝる淺ましき御事や候。これほどにいふがひなき御所存にて、天下の大事を思し召し立ちけることこそうたてけれ。はや、その御物の具を脱がせ給ひ候へ」と申して、御鎧の上帯を解き奉れば、宮げにもとや思し召しけん、御物の具鎧直垂まで脱ぎ換へさせ給ひて、「われもし生きたら

ば、汝が後生を弔ふべし。共に敵の手にかゝらば、冥途までも同じ岐ちまたに伴なふべし。」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手明神の御前を南へ向かつて落ちさせ給へば、義光は二の木戸の高櫓に登り、遙かに見送り奉りて、宮の御後影のかすかに隔たらせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狭間の板を切り落して、身をあらはにして、大音聲を揚げて名乗りけるは、「天照大神の御子孫、神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇第三皇子、一品兵部卿親王護良、逆臣のために滅され、恨みを泉下に報ぜんがために、唯今自害する有様見置きて、汝らが武運忽ちに盡きて、腹を切らんずる時の手本にせよ。」と言ふまゝに、鎧を脱いで櫓より下へ投げ落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫ねりぬきの二つ小袖を押し肌脱いで、白く清げなる肌はだかに刀を突き立て、左の脇より右のそば腹まで一文字にかき切つて、

陽はらわたつかんで櫓の板に投げつけ、太刀を口にくはへて、うつ伏しになつてぞ伏したりける。大手搦め手の寄せ手これを見て、すはや、犬塔宮の御自害あるは。われ先に御首を賜はらん」とて、四方の圍みを解いて一所に集る。その間に宮は引き違へて、天てんの川へぞ落ちさせ給ひける。

南より廻りける吉野の執行が勢五百餘騎、多年の案内者なれば、道を横ぎり、かさに廻りて、打ちとめ奉らんと取り籠むる。村上彦四郎義光が子息兵衛藏人義隆よしたかは、父が自害しつる時、共に腹を切らんと、二の木戸の櫓の下まで馳せ來たりたりけるを、父大いに諫めて、「父子の義はさる事なれども、暫く生きて宮の御先途を見果てまゐらせよ。」と庭訓ていごんを残しければ、力なく、暫くの命を延べて、宮の御供にぞ候ひける。落ち行く道の軍、事既に急にして、討死せずば、宮落

ち得させ給はじと覺えければ、義隆、唯一人踏み留りて、追つてかゝる敵の馬の諸膝薙いでは切りすゑ、平頸切つては、刎なね落させ、つゞら折りなる細道に、五百餘騎の敵を相受けて、半時ばかりぞ支へたる。義隆、節石の如くなりといへども、その身金鐵ならざれば、敵の取り巻いて射ける矢に、既に十餘箇所の創を被りてけり。死ぬるまでも、なほ敵の手にかゝらじとや思ひけん、小竹の一叢むらありける中へ走り入つて、腹かき切つて死ににけり。村上父子が敵を防ぎ、討死しけるその間に、宮は虎口に死を御遁れあつて、高野山へぞ落ちさせ給ひける。

八 文武の道

神皇正統記

平治より後、平氏世を亂りて二十六年、文治の初め、頼朝權を専ら

にせしより、父子相繼ぎて三十七年、承久に義時世を執り行ひしより百十三年。總べて百七十餘年の間、公の世を一つに知らせ給ふこと絶えにしに、後醍醐天皇の御代に、掌を返すよりもやすく一統し給ひぬること、宗廟の御計らひも時節ありけりと、天下舉りてぞ仰ぎ奉りける。

元弘三年の冬十月に、先づ東の奥を鎮めらるべしとて、參議右近中將源顯家卿を陸奥守になして遣さる。代々、和漢の稽古を業として、朝端に仕へ、政務に交はる道をのみこそ學び侍れ、吏途の方にも習はず、武勇の藝にも携らぬことなれば、たびくいなみ申ししかど、公家既に一統しぬ。文武の道二つあるべからず。昔は皇子皇孫、もしは執政の大臣の子孫のみこそ多くは軍の大將にもされしか。今より、武を兼ねて藩屏たるべし。と仰せ給ひて、御親ら旗

の銘を書かしめ給ひ、さまの兵器をさへ下し賜はる。任國に赴くことも絶えて久しくなりにしかば、古き例をたづねて、罷申の儀あり。御前に召して、勅語ありて御衣御馬などを賜はりき。なほ、奥の固めにもと申し請けて、皇子を一所伴なひ奉る。

かけまくも畏き今上天皇の御事なれば、細かには記さず。かの國に着きにければ、まことに奥の方さま、兩國をかけて皆靡き従ひにけり。

同じき十二月、左馬頭直義朝臣、相模守を兼ねて下向す。これも四品上野大守成良親王を伴なひ奉る。この親王、後に暫く征夷大將軍を兼せさせ給ふ。

建武乙亥の秋の頃、亡びにし高時が餘類謀反を起して、鎌倉に入りぬ。直義は成良親王を引き連れ奉りて、三河の國まで遁れにき。

高氏は申し請けて東國に向かひけるが、征夷將軍並びに諸國の總追捕使を望みけれど、征東將軍になされて、悉くは許されず。程なく東國は鎮まりにけれど、高氏望むところ達せずして、謀反を起す由聞えしが、十一月十日餘りにや、義貞を追討すべき由奏狀を奉り、即ち討つて上りければ、京中騒動す。追討のために、中務卿尊良親王を上將軍として、さるべき人々もあまた遣さる。武家には義貞朝臣を始めて、多くの兵を下されしに、十二月に官軍引き退きぬ。關々を固められしかど、次の年丙子の春正月十日、官軍また破れて朝敵既に近づく。よりにて、比叡山、東坂本に行幸して、日吉の社にぞましましける。

かゝりし間に、陸奥守鎮守府の將軍顯家卿この亂れを聞きて、親王を先に立て奉りて、陸奥出羽の軍兵を率して攻め上る。同じき十三日、近江の國に着きて、事の由を奏聞す。十四日に、江を渡りて坂本に参りしかば、官軍大きに力を得て、山門の衆徒までも萬歳を呼ばひき。

同じき十六日より合戦始りて、三十日、遂に朝敵を追ひ落す。やがて、その夜還幸し給ふ。高氏ら、なほ攝津の國に在りと聞えしかば、重ねて諸將を遣す。二月十三日、またこれを平げつ。朝敵は船に乗り、西國へなん落ちにける。諸將及び官軍はかつく歸り参りしを、東國の事おぼつかなしとて、親王もまた歸らせ給ふべし、顯家卿も任所に歸るべき由仰せらる。義貞は筑紫へ遣さる。

かくて、親王元服し給ひ、直ちに三品に敘し、陸奥の太守に任じます。この國の太守は初めたることなれど、たよりありとてぞ任じ給ふ。顯家卿は、わざと賞をば申し受けざりけるとぞ。

義貞朝臣は筑紫へ下りしが、播磨の國に朝敵の黨類ありとて、先づこれを退治すべしとて、日を送りしほどに、五月にもなりぬ。高氏ら西國の凶徒を相語らひて、重ねて攻め上る。官軍利なくして都に歸參せしほどに、同じき二十七日にまた山門に臨幸せしめ給ふ。八月に至るまでたびく合戦ありしかど、官軍いと進まず。十月十日の頃にや、主上都に出でさせ給ふ。

同じき十二月に、忍びて都を出でましまして、河内の國に正成といひしが一族らを召し具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りてわたらせ給ふ。もとの如く在位の儀にてぞましましてける。内侍所も移らせ給ひ、神璽も御身に從へ給ひけり。まことに奇特の事にこそ侍りしか。

吉野の御幸に先立ちて、義兵を起す輩も侍りき。臨幸の後には、

國々にも御志ある類ひ、あまた聞えしかど、次の年も暮れぬ。又の年戊寅の春二月、鎮守大將軍顯家卿、また親王を先立て申し、重ねて打ち上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢伊賀を経て、大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより、ところくの合戦あまたたび、互に勝負侍りしに、同じき五月、和泉の國にての戦に、時や到らざりけん、忠孝の道こゝに極まり侍りにき。苔の下に埋れぬものとは、唯、徒らに名をのみぞ留めてし。心憂き世にも侍るかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて、暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼き拂ひしより、事ならずして引き退く。北國に在りし義貞もたびく召されしかど、上り敢へずさせる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子また東へ向かはしめ

給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣、中將に轉じ、從三位に叙し、陸奥介、鎮守將軍を兼ねて遣さる。東國の官軍悉くかの節度に従ふべき由を仰せらる。親王、儲君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ふ。道の程もかたじけなかるべし、國にてはあらはさせ給へとなん申されし。七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して御船のよそひし、九月の初め、纜を解かれしに、十日頃のこゝとにや、上總の地近くより、空の氣色おどろしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方に漂はれ侍りしに、いと浪風おびたしくなりて、あまたの船行き方知らず侍りけるに、皇子の御船は、障りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣は、もとより御船に侍ひけり。同じ風の紛れに、東をさして常陸の國なる内の海に着きたる船侍りき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東

西に吹き分けける、末の世には珍かなる例にぞ侍るべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御すまひもいかゞと覺えしに、皇大神のとゞめ申させ給ひけるなるべし。後に吉野へ入らせましまして、御目の前にて、皇位を繼がせ給ひしかば、いとと思ひ合はせられて、尊くも侍るかな。又、常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵こはくなりぬ。奥州、野州の守も、次の年の春重ねて下向して、各國に着き侍りにき。

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧にかされさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。寢るが中なる夢の世は、今に始めぬ習ひとは知りながら、かゞ目の前なる心地して、老いの涙もかき敢へねば、筆の跡さへ滞りぬ。

かねて時をも悟らしめ給ひけるにや、前の夜より、親王をば左大

臣の亭へ移し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば、仰せのまゝにて後醍醐天皇と申す。天下を治め給ふこと二十一年。五十二歳おましましき。

功もなく徳もなきぬす人世に起りて、四とせ餘りがほど、宸襟を惱まし、御世を過させ給ひぬれば、御怨念の末空しく侍りなんや。今の御門、また天照大神よりこの方の正統を受けましましぬれば、この御光に争ひ奉る者やはあるべき。なか／＼かくて鎮まるべき時の運とぞ覺え侍る。

九 乃木將軍

つはものの 武勇なきには あらねども、
眞鐵なす べとんに投ぐる 人の肉、

往くものは 生きて還らぬ 強襲の

鋒を しばし轉じて、 右手の方

圖上なる 標の高さ 二零三、

巔の ふたつ聳ゆる 石やまに、

たえ／＼の 望みのいとを 掛けてこそ

きのふけふ 軍の主力を 向けてしか。

霜月の 三十日の 夕まぐれ、

將軍は 高崎山の 師團より

たゞ一騎、 柳樹房なる 本營に

歸らんと、 曲家屯をぞ 過ぎたまふ。

ほの暗き 道のほとりを 見たまへば、

身うち皆 血に塗れたる 卒ありて、
そびらには はやくときれし 將校の
亡骸を 昇き乗せてこそ 立てりけれ。

汝は誰ぞ、そを何處にか 負ひて行く。

聞し召せ、背負ひまつるは、奴わが

主と頼む 乃木將軍の 愛兒なり。

年老いし 將軍の家の 二人子、

そのひとり 勝典ぬしは いちはやく

南山に 討たれ給ひて、残れるは

おとうとの 保典のぬし ひとりのみ、

背負へるは その一人子の 亡骸ぞ。

父君は 心をしく、わが主をも

隊附きの まゝにあらせて、討死の

身の果ては おのれと三人 葬をば

ひと時に 營めとのり 給ひしを、

人々の 強ひて計らひ つるにより、

さいつ頃 友安旅團の 副官に

職かはり まだ程經ぬに、この朝開

あへなくも 空しき骸と なりましぬ。

果てましし 所は高地 二零三、

目鏡もて 敵の備へを 望みます

うら若き 額のたゞ中 打ち貫かれ、

ひと言を のたまはん ひまもなく、
 持ち口の 南の峯に うせ給ふ。
 その骸を 奴背負ひて この村に
 ありと聞く 野戦病院 たづぬれど、
 くるほしき 心からにや たづねえず。

かくいふを、 駒をとめて 聞きましし。

將軍は、 病院の 旗ある方を

鞭あげて 彼方にこそと さし給ふ。

面ざしは かはたれ時に 見えねども、

目ざとくも 雲の絶え間ゆ 覗ひし

さむ空に まだ輝かぬ 冬の星、

更闌けて 友なる星に、 將軍の

睫毛だに 動かざりきと 語りけり。

(森林太郎ノ作ニ據ル)

十 心の小徑

樺太の南半分が日本のものになつた、その喜びのまだ新たな頃、
 露艦ノーウィックの巨體が大泊の港口に坐礁したまふ、まだその殘
 骸を半ば波の上にさらしてゐる頃だつた。樺太アイヌ語は、北海
 道アイヌ語とどれほど違ふか。樺太アイヌは、どんな物の言ひ方
 をしてゐるか。アイヌ特有の敘事詩が、もしやそこにも傳承され
 てゐはしないか。今まで抱いてゐたアイヌ語學上の疑問とその
 解決とが、この方言に照らして、もしや實證することができるので

はあるまいか。かういふ空想が、一ばいに私の心を占めて、夢にまで見る誘惑となり、とうとう歴史的思ひ出の多いこの新版圖へ、單身踏査を思ひ立つに至つたのである。

それは明治四十年の夏のことである。小樽をたつたのは七月の十二日、樺太の奥山には、木立に混つて山櫻がちらちら咲いてゐる頃であつた。大泊に船待ちをし、毎日濃霧をかこちながら、しびれを切らして、やつと米と味噌とを用意して、役所の見廻りの小蒸氣に乗せてもらつて、目ざす東海岸へ船出をしたのは十二日目。それでも海の上はまだ霧が深く、三晩船の上に寝て、二十七日の朝やつと本船のボートで送られて、オチョボッカのアイヌ部落へ最初の足跡を印したのである。

思ひに思つてはるゝ、訪ねて來たものの、部落の人にとつては、

私などどこからか迷つて來た犬ころほどの興もひかない存在だつた。なまじひに、民政署の船に乗つて來た洋服姿は、役所の看守人でもあるかのやうな印象をさへ與へて、ともすれば、ちよつと疑ひ深い目を光らせ、私の行く所、立つ所、誰も皆背を向けてしまひ、口をつぐんでしまふ。笑ひさゝめいてゐた者も、笑ひををさめ、寄り合つてゐた者も散じてしまふ。その寂しさは譬へやうもない。かいかもく言葉が通ぜず、片言隻語も採集できずに、空しく一日が暮れて行くのである。

役所の船から下りたものだから、ある所、だけは、酋長の冬期の住み家をがらんだうにあけて、一人ぼつんとゐさせてくれたのである。又、三度々々の食事は、同じやうに、髪を垂した入れ墨の娘が來て、黙つて、私の米と味噌とを小鍋へ入れて持ち去つて、一時間もす

ると、温かい飯と汁とを作つて来て、黙つて置いて行つてくれる。但し、物を言ひかけたら最後、ぐんぐん逃げて行つてしまふ。晝のうちには、まだ繪にかいたやうなアイヌの姿をまのあたりに見てゐるばかりでも、慰めになつたが、夜になつて、鼻を摘ままれるのもわからないやうな闇の中に、磯打つ浪のざあと引いて行くわびしい音のみを聞いてゐると、物言ふ相手もない寂しさが込み上げて、啞の上に盲目にさへ生まれて来たかのやうな寂寥を感じた。

二日目も同じやうに暮れ、三日目もまたそれを繰り返さなければならなかつた。四日目のことだつた。寂しさは、もはや單なる寂しさではなく、東京をたつて一箇月、遂に何の得るところもなく歸らなければならぬのだらうかといふ不安と憂悶とが頭をかき亂して、茫然として屋外に立つたちやうどその時——ふと見ると、

後に子供たちが何かわめきながら、無心に遊んでゐる。行くともなく、その方へ引き寄せられて行つたのは、言葉の一はしても拾ひたかつたからである。じつと耳を傾けると、何といふ發音だらう。しやつくりしながら物言ふやうなわめきやうで、ひと言も耳に止らない。但し、子供だけに、私が近く立つても、別して氣にもせず、夢中にさへづつて遊んでゐる。ふと、その一人の腰に下つてゐる小刀にさはつて、北海道アイヌ語で「それは何なの。」と尋ねてみた。子供らは一せいに私の顔を見た。と思つたら、一度に「わつ。」とはやしたてて、蜘蛛の子を散らすやうに逃げ散つた。「通じないかな。」と獨りつぶやきながら、途方にくれてゐると、また三々五々集つては、何か大聲にわめきながら遊ぶのである。また寄つて行つた。今度は言葉を変へて、一人の子の耳に下げた環を指さして「何といふも

のか。」と問うてみた。また振り返つて全部の子供が私を仰いだが、「何を言つてるんだ。」といった調子に、「わあつ。」とわめいて逃げ出した。子供らのうちに、繪に見る唐子のやうな着物——多分、滿洲方面からの外來品——を着てゐるのが一人あつた。その恰好がちよつとおもしろかつたので、單語を採集するはずの手帳へ、しようことなしに、その子を寫生し始めた。

私が、その子を見ては、鉛筆を動かしくするのを目ざとく見つけた子供の一人が、先づ何とかわめいた。他の子も、私を見て、また何とかわめいた。遊ぶのをよして、みんな私を注視した。眞先に見つけた子が、先づおづ／＼としやがんでゐる私へ近寄つて来て、物珍しげに私のかくのをのぞいた。忽ち、どや／＼とやつて来て、みんなでのぞいた。年かさのが、唐子の服裝をした子を指さして、

「お前がかかれたぞ。」とでもいふやうな様子をした。するとわいわいと言ひだして、私の横からのぞく者、背後からのぞく者、中には無遠慮なのが、指を突き出して、もう私の畫面をつゝいて、「こゝが頭で、こゝが足だ、手だ。」など言ふやうに、自分の發見を得意になつて、説明を引き受けてゐるのさへある。がちつともその言ふことが聞き取れない。

その時だつた。ふと思ひついて、一枚新しい所をめくつて、誰にも直ぐわかるやうに、大きく子供の顔をかいてみた。目を二つ並べてかくと、年かさのが、一番先に「シシ、シシ」と言つた。他の子も「シシ、他のも、シシ。」と／＼、さしのぞいてゐた子供の口が皆「シシ、シシ、シシ」。騒がしいといつたらない。そのさまはちやうど、「目だよ、目なんだよ。」「うん、目だ。」「目だ、目だ。」とでもいふやうに聞えたので

ある。

さうだ、北海道アイヌは、目をば「シク」と言ふ。樺太ではそれを「シシ」と言ふのかも知れない、といふことが頭へひらめいた。急いで繪の目から線を横へ引つばつて、手帳の隅の所へ「*eye*」と記入し、それから悠々と鼻をかいに行つた。年かさの子が、鋭い聲で「エトゥー、プイ、エトゥー、プイ」と叫ぶ。と、残りの子供らも、聲々に「エトゥー、プイ、エトゥー、プイ」。私はをかしくなつたのをこらへて、また鼻の尖端から線を引いて行つて、その端へ「*eye-pin*」と書き込んだ。さうして、口をかいに行くと、やつぱり年かさの子を眞先に「チャロ、チャロ」と大騒ぎ。眉をかくと「ラル、ラル」。頭をかくと「サバ、サバ」。耳をかくと「キサラ、プイ、キサラ、プイ」。

忽ちのうちに肢體の名が十數箇期せずして採集できた。をか

しいやら、愉快やら。かうなつたら、もう何でもない。向かふから争つて言つてくれるのだから。

唯、私は「なに」といふ一語がほしくなつた。それさへわかれば、心のまゝに物をさして、その名を聞くことができるのである。そこで、ふと思ひついて、もう一枚をめぐつて、今度はめちやくちやな線をぐるぐる、ぐるぐる引き廻した。年かさの子が首をかしげた。さうして「ヘマタ」と叫んだ。すると、他の子供も皆變な顔をして、口口に「ヘマタ」「ヘマタ」「ヘマタ」。

うん。北海道で「なに」といふことを「ヘマングダ」と言ふ。これだ、と思つたから、先づ試みよう、と、身のまはりを見廻して、足もとの小石を拾つて、私からあべこべに「ヘマタ」と叫んでやつた。驚くべし、群がる子供らが私の手もとへくるくくした目を向けて、口々に「スマ、

スマ」と叫ぶではないか。北海道で石のことを「シュマ」と言ふ。してみると「スマ」は石のことで、さうして「ヘマタ」はやつぱり「なに」といふことに違ひない。

そこで勇氣を得ても一つ足もとの草を手にもしり取つて「ヘマタ」と高く捧げると、子供たちは「ムン、ムン、ムン」と、びよん／＼跳びながら答へる。私はうれしさに、子供らと一しよにびよん／＼跳んで笑つた。

をかしかつたのは、私が自分の五厘ぐらゐしかかない七、八本の顎鬚を摘まんで見せて、「ヘマタ」と尋ねた時である。聲に應じて、子供らは「ノホキリ、ノホキリ」と答へてくれたので、「nokiri」顎鬚」と記入した。何ぞ知らん、それは下顎だつた。髯面に馴れてゐるアイヌの子供たちの目には、私の摘まんだ鬚などは、鬚の數に入らないので、

私の指は顎を摘まんでゐると思つたのである。

私はかうして、忽ちのうちに七十四箇の單語を採集して、元氣づいた。折から、河原に集つて鱒を捕らへてゐる大勢の大人たちの所へ下りて行つて、覺えたばかりのほや／＼の單語を勇敢に使つてみた。河原の石を指さしては「スマ」と呼び、青草を指さしては「ムン」、鱒を見ては「ヘモイ」、鱒の頭を指さしては「ヘモイサバ」、鱒の目を指さしては「ヘモイシシ」、鱒の口を指さしては「ヘモイチャロ」。

これまで、むづかしい顔ばかりしてゐた髯面が、もじや／＼の髯の間から白い齒をあらはした。これまで、そむけ／＼してゐた婦女子の顔にも、眞青な入れ墨の中から白い齒が見えた。明らかに皆笑つたのである。中には、向かふから網を持つてゐる手を振つて見せて、「ヤー(網)」と言つたり、砂地を指さして「オタ(砂)」と言つたりし

た者もある。急いで手帳に書きつけながら、その發音をまねると、不思議さうに手帳を見に寄つて來る者もあつた。婦女子の群では、「いつ覺えたらう。」とか、「よく覺えたものだ。」とか言ふらしい感歎の聲を揚げた者もあつた。

かうした間に、私と全舞臺との間を遮つてゐた幕が、一ぺんに切つて落されたのである。さしも越えにくかつた禁園の垣根が、急に私の前に開けたのである。言葉こそ、固く鎖した心の城府へ通ふ唯一の小徑であつた。渠成つて水到る。こゝに到つて、私は何物をもためらはず、總べてを捨ててまつしぐらにこの小徑を進んだ。

一週間の後には、ちよつと私が顔を出しても、右から左から言葉を投げられる。朝起きて、河原へ顔を洗ひに手拭を下げて通ると、

兩側のアイヌ小屋から、「どこへ行きますか。」どうしたんですか。」などと、まるでたんぼの蝗むしが跳び出すやうに、ばたくと跳び出して來て言葉をかけ、私がうまく答へられたと言つては笑ひ、とんちんかんに答へたと言つては笑ひ、顔を洗つてゐると、もう子供たちが起きて、後へ一ばいやつて來てゐる。夜は、さしもがらんだうな私の宿も一ばいになつて、身動きもならないほど、若い者や年寄りが詰めかけて、踊る、歌ふ、しゃべる。

四十日の滞在の後に、大抵の話は支障なくできるやうになつた。上樺太アイヌ語文法の大要と語彙と、北蝦夷古謠遺篇三千行の敘事詩の採録を家苞いぼに、私は生涯忘れがたい思ひを残して、この部落の老若に別れを告げた。

(金田一京助ノ文ニ據ル)

十一 學者の苦心

十年一昔といふことを思ふと、上田松井の二君が國語辭書の編纂に着手せられてからも、一昔はとうにすんだ。編纂開始の心祝ひといふので、知友數名が晚餐會に招かれて打ち興じたのは、ついでこの間のやうな氣もするが、その頃はじめて小學校に入つた予が娘は、既に嫁いで人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今や、その第一巻がいよゝ出版になるといふ音づれを聞いて、予は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかも、それよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流れは水の流れと同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極まりがない。この一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、わが日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易やの進歩發展の跡を見ても、その間の十年は、通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業は、かういふ中に、徐々にその工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘り出されて、選り分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬、幾十萬とも知れない古語や新語は、幾百部、幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書き留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾たびか改る。同じ仕事が果てしなく、いつまでも續く。はたから見れば、はかの行かぬことは、はがゆいやうで、いつ片の附くことかと危ぶまれるほどであつた。編輯室は松井君の邸内の離れ家にあつた

が、それでも夜半の半鐘に膽を冷して、よそながら無事を祈つたことも幾たびかわからぬ。二君の筆と頭腦は間斷なくこの間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、その進歩は遅いが、その成果は確實であつた。かくて、粒々積み上げた砂子も遂には山を成す譬のやうに、編纂がやゝ緒に就いたまでには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾たびとなく進水式に浮かび出たのであつた。

學者の仕事はぢみである。目ざましく世人を驚かすやうなことはしない。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども、一たびその室にはいつて、山成す材料を見上げる者は、何人もその難事業たることを承認せずにはゐられぬ。又、編纂者の決心と根氣とを尊敬せずにはゐられぬ。さ

うして、それが決して學者の閑事業ではなくて、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて、國家教育の根柢となる國語の調査整理が、緊急な事業であることはいふまでもない。國家の發展は、教育の力によらねばならず、教育の進歩は、國語の普及が根本である。狭い編輯室に行はれて、何ら世人の注意をひかなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふところに、學者の生命があり、學術の意義があるのである。

十年以前に比べて、鐵道の哩數や軍艦の噸數の大いに増加したのを祝賀する人は、これと同時に、數隻の巡洋艦ぐらゐで満足してゐたわが國語界が、十餘年後の今日、こゝに一大戰艦にも譬へるべき本書を有するに至つたことを驚歎し、慶賀しなければならぬ。

文物の整備することは、國家の誇りであり、精神界を支配する有力な武器である。完全な一辭書の存在することは、國民にとつての大きな強みである。この一大産物が、堅忍不拔な二君の手によつて成就せられたことは、友人たる予の言ひ知らぬ喜悅を感ずる所以である。この十年は、國語界に於いてもまた、無意味な十年ではなかつたのである。

學者の事業は、いつも世間と没交渉のものではない。専心を研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於いても、進歩して行く世間を一日もよそに見てゐるわけには行かぬ。十年一昔の間には、國語そのものの中にも、絶えず變遷が行はれてゐる。それに注意するだけでも、容易な業ではない。靜寂な編輯室は、紛糾した實社會と常に相往來してゐるのである。

幾多の困難に打ち克つて、國民の覺知せぬ間に、その背後に大きな國家的事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。後世の人は、必ずこれを、明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。

予は二君の満足と喜悅を察知すると同時に、今かくと十餘年を待ち暮した同友と共に、先づ二君の成業を祝して、一大白を浮かべようと思ふのである。

(芳賀矢一ノ文ニ據ル)

十二 明治天皇御製

折にふれて 明治三十七年

くにの爲身をかへりみぬますらを、あまたえにけり

この時にしも

よと、もに語りつたへよ國のため命をすてし人のい
さをを

思ふことつらぬきはて、國民の心やすめむときぞま
たる、

いそのかみ古きためしをたづねつ、新しき世のこと
もさだめむ

春 駒

た、かひのにはまだしらぬ若駒も勇みまさりてみゆ
る春かな

秋夜對月

た、かひのにはに心をやりながらむかひふかしつ秋

のよの月

鏡

國といふくにかぐみとなるばかりみがけますらを
大和だましひ

をりにふれて 明治三十八年

暑しともいはれざりけり戦の場にあけくれたつ人お
もへば

おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや國
民

とつくにの人もよりきてかちいくさことほぐ世こそ
うれしかりけれ

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐ

るけふかな

えぞのおく南の島のはてまでもおひしげらせよわが
をしへ草

ひらけゆく世のさま見ればなかくに昔にかへるこ
ともありけり

凱旋の時

外國にかばねさらし、ますらをの魂も都にけふかへ
るらむ

をりにふれて 明治三十九年

軍人ちかくつどへて海山のものがたりきくときは來
にけり

ますらをも涙をのみて國のためたふれし人のうへを

かたりつ

波風はしづまりはて、よもの海にてりこそわたれ天
つ日のかげ

神 祇

日本の國の光のそひゆくも神の御稜威によりてな
りけり

かみかぜの伊勢の宮居を拜みての後こそきかめ朝ま
つりごと

道

ひろくなり狭くなりつ、神代よりたえせぬものは敷
島の道

花 明治四十五年

ありとある人をつどへて春ごとに花のうたげをひら
きてしがな

附録

一 佐久間艇長の遺書

佐久間大尉が六號艇長を命ぜられたのは、明治四十二年の十二月であるが、大尉はそれまでに、一號艇から四號艇までの艇長を歴任し、潜水艇の専門知識が深く、又、日露戦争に巡洋艦や水雷艇に乗り組み、旅順や日本海で武勳を示して、軍人としての「仕上げ」が出来てゐる人であつた。生地は福井縣、父は神官で、子供の時から、義務感と斷行力の強い人がらだつたといはれてゐる。

大尉がこの六號艇に乗り組んだ時、恐らくその胸中には、この最も不完全な潜水艇をして、最大の効率を挙げしめようといふ決意が潜んでゐたに相違ない。當時の潜水艇は、あらゆる事が實驗であり、摸索であつて、多

くの研究課題が山積してゐたのである。その課題は、乗組員自身が挺身して解決するほかに道がなかつた。

例へば、ガソリン機関による半潜航といふことも、當時の重要な課題の一つだつた。六號艇の速力は、水上八ノット、水中四ノット、僚艇のそれも大同小異で、どん龜の渾名のある所以であるが、せめて、その隱密性を保ちつゝ、水上航走に近い速力と航續力を得たいといふことが、當事者の念願であつた。

しかし、これは非常に危険な仕事で、煙管のやうな通風筒を水面に現しながら潜航するのだから、波でもかぶれば、いつ浸水を來たすかもわからない。もつとも、通風筒にはスルイスバルブといふものがついてゐて、浸水と見れば、直ぐそれを閉ぢればよいわけだが、うまく間に合ふかどうかといふ點に、大きな冒険が賭けられてゐた。佐久間大尉は、最も性能の悪い六號艇に於いて、敢然とその可能を試みたのである。

明治四十三年四月十一日に、第一潜水隊は瀬戸内海から別府方面に巡航したのであるが、例によつて、六號艇はその行動に加ることができず、四月十五日まで、母艇の歴山丸と共に内海で作業を行ひ、新湊沖にさしかゝつた。時間は午前九時五十分頃であつたが、その時、佐久間大尉は、半潜航の實驗を始めたのである。

そのうちに、六號艇は全潜航の状態になつたが、歴山丸では、潜航訓練を始めたものと認めて、別に不審を起さなかつた。實際、當日は、海底沈坐の實驗も合はせて行ふことになつてゐたのである。

ところが、餘りに潜航時間が長いので、異變を感じ始め、その旨を呉在泊の母艦韓崎に報告したのである。韓崎は直ちに鎮守府に報告したので、多數の驅逐艦、水雷艇が現場へ出動した。上の關にゐた母艦豊橋も馳せ參じて、それから徹宵、沈没箇所の搜索が始められた。翌十六日午後三時に至つて、富士と伊吹の艦載水雷艇が、沈下した艇體を發見した。しかし、

引あげには種々の困難が伴なつて、浅瀬に曳いて輕荷状態にしたのは、十七日の午後一時であつた。

當時の潜水艇の設備からいつて、それだけの時間を経過したあとに、生存者があることは、誰も豫期できなかつた。問題は、帝國海軍初の潜水艦遭難事件に、乗組員がいかにして死んだか、といふことであつた。實は、その少し以前に、某國海軍に同様の事件があつて、乗組員の甚だしい醜狀が、世間の肩をひそめさせてゐたからである。

眞先に六號艇内へとび入つた吉川中佐と中城大尉の心中には、悲しみのうちに、相當複雑な緊張があつたはずである。

ところが、狭い艇内を一巡して、中佐は、
「宜しいつ。」

と絶叫したと思ふと、大聲を揚げて泣きだしてしまつたのである。

佐久間大尉は艇長の居所たる司令塔の中に、原山機關中尉は電動機のそばに、鈴木上等機關兵曹はガソリン機關のそばに、舵手は舵席に、空氣手は壓搾空氣罐の前に、それらの部署を一寸も離れず、みごとな最期を遂げてゐた。

唯、二人だけが部署を離れてゐた。長谷川中尉と門田上等兵曹の二人だつた。ところが、二人の死骸が横たはつてゐたのは、ガソリンパイプの破れた箇所だつた。二人が部署を離れたのは、烈しいガソリンの臭氣と闘つて、最後まで、その噴出を遮らうとした結果であることが證據立てられた。

吉川中佐と中城大尉が、男泣きに泣き崩れたのは當然のことであつた。これ以上に、殉難潜水艦乗りのりつばな、死に方は、考へられなかつたからである。

「宜しいつ。」

吉川中佐のその一語は、實に簡にして、あらゆる批判と感動を言ひ盡く

したものである。

中佐たちのあとには、母艦豊橋の軍醫長や看護部員が艇内にはいつて、規則的な検視をしてから、死體を厚く毛布で包んで、豊橋に收容した。さうして、艦員は泣きながら十四の遺骸に新しい軍服を着せた。やがて、豊橋が靜かに吳へ入港した時には、司令長官の特命によつて、總べての在泊艦艇が、登舷禮式を以つてこれを迎へた。

しかし、佐久間艇長への尊敬と哀悼は、やがて十倍にもたかまらねばならなかつた。それは、艇長の軍服のかくしから、一冊の手帳が発見された時からである。

発見者は、鉛筆の走り書きに過ぎないその手帳を、艦長の私事の備忘くらゐに思つて、さして重要視しなかつたが、やがて熟讀してみても驚いた。それは古今を貫ぬく大遺言書だつた。あの環境に於いて、あの運命に於いて、人間がよくもこれだけの事を書き得たと思はせるほど、前例のない意志と義務感の勝利に輝く遺書だつた。

沈没と同時に電燈が消えて、ビーブホールから僅かに洩れて來る微光の下で、佐久間大尉はガソリンの悪ガスにあへぎながら、それを書き終へたのである。沈没の原因、沈没後のあらゆる經過を報告し、その上、潜水艇の將來を思ひ、又、上官として部下への情誼、先輩への告別、最後の意識が消える瞬間の時刻まで、洩れなく書き遺してゐる。

超人とは、まさに大尉のことである。その時、大尉の齡三十一歳、夫人は前年に歿し、二歳の遺女あるのみであつた。

佐久間艇長遺言

小官ノ不注意ニヨリ、陛下ノ艇ヲ沈メ部下ヲ殺ス、誠ニ申譯無シ、サレド、艇員一同死ニ至ルマデ、皆ヨクソノ職ヲ守リ、沈着ニ事ヲ處セリ、我レ等ハ國家ノ爲メ職ニ斃レシト雖モ、唯、遺憾トスル所ハ天下ノ士

ハ之ヲ誤リ、以テ將來潜水艇ノ發展ニ打撃ヲ與フルニ至ラザルヤヲ憂フルニアリ、希クハ諸君益、勉勵以テ此ノ誤解ナク、將來潜水艇ノ發展研究ニ全力ヲ盡クサレンコトヲ。サスレバ、我レ等一モ遺憾トスル所ナシ。

沈没ノ原因

瓦素林潛航ノ際、過度深入セシ爲メ、スルイスバルブヲ締メントセシモ、途中「チエン」キレ、依テ手ニテ之レヲシメタルモ後レ、後部ニ満水セリ。約二十五度ノ傾斜ニテ沈降セリ。

沈没後ノ狀況

一、傾斜約仰角十三度位。
二、配電盤ツカリタル爲メ電燈消エ、電纜燃エ、惡瓦斯ヲ發生、呼吸ニ困難ヲ感ゼリ。
十四日午前十時頃沈没ス。此ノ惡ガスノ下ニ、手働ポンプニテ排水

ニカム。

一、沈下ト共ニ「メンタンク」ヲ排水セリ。燈消エ「ゲージ」見エザレドモ、「メンタンク」ハ排水シ終レルモノト認ム。電流ハ全ク使用スル能ハズ。電液ハ溢ルモ少々。海水入ラズ。「クロリンガス」發生セズ。殘氣ハ五〇〇磅位ナリ。唯、頼ム所ハ手働ポンプアルノミ。

(右十一時四十五分司令塔ノ明リニテ記ス。)

溢入ノ水ニ浸サレ、乗員大部衣濕フ。寒冷ヲ感ズ。

余ハ常ニ潜水艇員ハ沈着細心ノ注意ヲ要スルト共ニ大膽ニ行動セザレバ、其ノ發展ヲ望ム可カラズ、細心ノ餘リ畏縮セザランコトヲ戒メタリ。世ノ人ハ、此ノ失敗ヲ以テ或ハ嘲笑スルモノアラン。サレド、我レハ前言ノ誤リナキヲ確信ス。

一、司令塔ノ深度計ハ五十二ヲ示シ、排水ニ勉メドモ、十二時迄ハ停止シテ動カズ。コノ邊、深度ハ十尋位ナレバ、正シキモノナラン。

一、潜水艇員士卒ハ、拔群中ノ拔群者ヨリ採用スルヲ要ス。カ、ルト
キニ困ル故。幸ニ、本艇員ハ皆ヨク其職ヲ盡クセリ。満足ニ思フ。
我レハ常ニ家ヲ出ヅレバ死ヲ期ス。サレバ、遺言狀ハ既ニ「カラサキ」
引出ノ中ニアリ。

(之レ但、私事ニ關スルコト、言フ必要ナシ。田口淺見兄ヨ之レヲ愚父
ニ渡タサレヨ。)

公遺言

謹ンデ

陛下ニ白ス、我が部下ノ遺族ヲシテ窮スルモノ無カラシメ給ハラシ
コトヲ。我が念頭ニ懸ルモノ之レアルノミ。
左ノ諸君ニ宜敷。

(順序不順)

一、齋藤大臣

一、島村中將

一、藤井中將

一、名和少將

一、山下少將

一、成田少將

一、(氣壓高マリ、鼓マクヲ破ラル、如キ感アリ。)

一、小栗大佐

一、井出大佐

一、松村中佐(純一)

一、松村大佐(龍)

一、松村少佐(菊)

(小生ノ兄ナリ。)

一、舟越大佐

一、成田鋼太郎先生

一、生田小金次先生

十二時三十分。呼吸非常ニクルシイ。

瓦素林ヲブローアウトセシシ積リナレドモ、ガソリンニヨウタ。

一、中野大佐

十二時四十分ナリ。

(岩田豊雄ノ文ニ據ル)

二 俳句行

遅しい機械力

古い歴史をもつ〇〇船渠は、低い春の山に取り囲まれ、一帯の海水が彎入してゐる所にあつて、好箇の自然船渠ともいひたいやうな感じである。倶楽部に少憩して、その幾多の起重機の絶えず動いて、大きな鐵板を釣り

上げてゐる様子や、鋸の響き、鉦打ちの鳴り轟いてゐる様子やを見ると、總べてが強く心に響く。

船渠あり春山青き潮を抱き

起重機の動きやまずよ春の雲

その船渠の口まで波打つてゐる春の潮には、まだ胴體の赤いまゝのものや、青く塗られたものなどが浮かんでゐる。無数の鷗が、その間を波のまに／＼漂ひ遊び、或は大空高く舞ひ上つてゐる。

軌道傳ひに、たくさんの車を避けながら、鐵板の山と積まれてゐる間を抜けて、棟を並べた工場にはいつてみる。旋盤で大きな鐵を削つてゐるそばに、腕組をして突つ立つてゐる工員の心には、休む時がないのである。さうだが、手づから手を下す時は稀であつて、總べて機械の大きな力が仕事をしてゐるのである。

眞赤な火が燃え上つて、堅い鐵の棒が館の如く折り曲げられてゐる所

もある。坩堝くわくに湯の如く煮えたつてゐる鐵を杓しやくで汲んで鑄型に注ぎ込む。それが物に觸れて、火花を發する。熟練工であらう、靜かに事が運ばれて行く。

春山に響きこだます鏈の音

船生まれ艦生まれ暮れ遅きかな

離れた所に分工場もあれば、寮舎もある。そこへの通ひ船に工員諸君と親しく肩を並べて乗つた。その悉くが、油のしみた工服を着て、顔も手足もよごれてゐる人たちばかりだが、その底には、張りきつた力と、撃ちてし止まむの精神に燃えてゐるものを看取する。

春海に浮かめば鏈の音遠し

諸所にある寮舎の一つを見舞つた。何の粉飾も施してない木造の建物であるが、掃除が行き届いてゐて、極めて清潔である。寮生である工員たちは、大概出勤して留守であつたが、たま／＼非番と思はれる少數の人の掛聲勇ましい竹刀の音が聞える。それは食堂のそばの道場であつた。晝食後、俳句懇談會こんだんかいが俱樂部の一室で開かれた。先づ集つた句の中で私の選んだ句を読みあげ、その講評をした。中で佳句として推すべきものは、左の四句であつた。

寒月や起重機外板釣りて立ち

大霜の嚴しさに堪へ船つくる

獨り居に親しみもあり冬の蠅ば

召され征く馬嘶いなきて柿の宿

佳句として推した四人の作者に、厚生課長は起立を命じたが、すつくと立ち上つた四氏は、いづれも軀幹かんの長大な偉丈夫であつた。講評を終へたあとで、私は「生む」といふことに就いて小話をした。何でも、物を生むといふことは楽しいことである。今まで何にもないところに、物を生み出すといふことは、不思議なことであり、又、人間の一番

楽しいことでもある。俳句を生むといふこともまた、その楽しみの一つである。諸君は、たくさん艦船を生む上に、なほ俳句を生むといふことを知つてゐるのである。それは休息であり、慰安であり、新しい力の源泉である。

こんなことを話して、それから懇談會に移り、何か質問があればお答へするといふことを言つた。こもろゝ立ち上つて、平生抱いてゐる俳句に就いての疑問、職場に於ける従業員としての作句の態度、季題を捜すことの困難などに就いて、割切な質問があつた。

職員・工員諸士の態度は極めて節度があり、且つ率直であつた。私たちは、快感を以つてそれらに答へながら、時の過ぎるのを知らなかつた。

(高濱清ノ文ニ據ル)

戦ふ炭焼き部落

水郡線の西金といふ一寒驛から二里ほどはいつた山奥に、茨城縣營の

その炭焼き、部落はあるのだつた。だん／＼聞いてみると、なか／＼大變な所らしい。縣廳の技手の方を案内に、一行は六人。西金驛はちら／＼と雪だつた。

炭の馬力がごとり／＼やつて来る。炭負ひ女が岩かどにもたれて、一息入れてゐる。その背負梯子には、三俵の炭——十二、三貫目のもの——をつけてゐる。炭俵を編むのは、可憐な學童の奉仕だといふ。

女にも適ふ務めの炭を負ふ

子供にもできて炭俵編む勝たんため

岨いづみに立つて眺めると、炭焼き部落をかまくまつて巉巖さんがんがそ／＼り立つてゐる。炭負ひ女が命がけの所もありますよ。」と言つたその峻嶮しゅんげんを、あへぎあへぎはひ登ると、やつと懐かしい炭竈すすかまの香の流れる窪地くぼちに出た。

焼き夫一人に竈一つづつで、約五十竈、今後五年間に二十萬俵といふ縣の計畫ださうである。

一竈に幾日かゝつて、何俵焼けて、手間賃が一俵幾ら、運賃が幾らどこへどう運ばれて、どんな用途に向けられるかなど、いろ／＼聞いてみると、やつぱり戦争に役立つのが大部分なのである。

この山深い岨陰の、平家の後裔の村の炭焼きたちが——黙々と戸前を塗つてゐる大きな手の——形容詞でなく、撃滅の戦を戦つてゐるわけである。縣では、こゝに道場を建て、この大切な生産戦士を訓練し、激励し、慰安してゐるのであつた。

勝つための務めの重き炭を焼き

炭木樵る谷のこだまも敵を撃つ

一片のこぼれ炭をもあだにせじ

溪の雪が凍てて、白々と木の間に透けて見える。木の根にすがつて谷窪におり、炭竈の煙にむせながら、炭焼きのをぢさんと立ち話をする。目も口もなく炭によごれた顔に、一點の汚れもない人間の善性佛心が

美しく輝いてゐる。自分たちの心掛が、勤勞が、堪忍耐乏が、どんなにりつぱに尊いものであるかなど、考へてみようともしないこの人たちなのである。

炭小屋の留守を守る女房が、泣く子を揺すぶりながら、眞黒い土瓶にお茶を沸かしてくれた。

炭小屋の澁き茶にむせ烟にむせ

炭山の戦士たちに、何か話などと、とてもそんな暇もなかつたけれど、假にあつたところ、話を聞かされて訓へられるのは、かの人たちではなくて、當然私の方であつたのだ。落日に映える炭山を振り返りながら、山路を下る私は、感謝の涙に濡れつゝ、心は何か明かるかつた。

道暮れぬかの炭小屋も灯すらん

炭焼きは炭を焼きつゝ決戦下

(富安謙次ノ文ニ據ル)

三 青芝の山

滿洲の山は禿げ山だといふ人がある。しかし赤い地肌の出た禿げ山はめつたにない。實際は青草の生えた山である。その青芝の山は、日本でいへば嫩草山によく似てゐる。大連を出てから奉天に到るまでの滿鐵沿線は、この嫩草山の連続だと言つても言ひ過ぎではない。この山には境界もないし、立入り禁止の札も立つてゐない。登るも、遊ぶも、寝ころぶも勝手である。

春先といつても、南滿洲では五月の初め、奥地に進むに従つて五月の終り、六月の初めと順に遅れては行くが、芝が青み始める。芝草の中でも、一番早いのは「やちかうぼう」である。枯れ葉の間からすい／＼と延びた莖の先に、光澤のある褐色の穂がついてゐて、折しも多い春風の中で踊つてゐる。しかし實際は、よほど眼のよい人でなくては見つけることができない。それほど縹渺たる草である。

一むら青く、すつかり春めいてゐる所には、大抵「くろかはふすげ」の花が咲いてゐる。これは、山でなくても、道端や土手の上などにもよく見られる。僅か二、三センチも上げた頂上に、黄金色のぢみな花を咲かせてゐる。誰も摘み取つて鑑賞しようとする人はない。又、さうすべき花でもない。鋤鍬だの肥料だのといふ人間世界のものが届かない、なだらかな丘の芝生には「みのぼろ」が多い。これは、鬼芝などの普通の芝に先がけてよく茂る柔かい芝で、一株から四本も五本も割合にりつばな穂を抽く草である。これなどは、若草摘みの子供たちにも人氣がある。しかし、名を知つてゐる人は餘りない。

春が少したけると、茅花が穂を出す。それは茅の幼い穂で、少し甘みを帯びた純な匂ひがする。茅花は老けやすいので、その苞を開いて、中の穂

を出してみても、たべられるやうな柔かいのに出會はすことはむづかしい。茅花の穂をたべることには、内地のやうに、早くから春がもよほしてゐる國の專賣かも知れない。しかし、あの甘い匂ひはどこも同じであるらしい。

茅花の穂が開くと、山腹や原つばが一時に棉花を散らしたやうに見える。それがすんでから、割合に幅の廣い、茅の長い葉がぼつ／＼と出揃つて来る。

その頃になると、いちごつなぎの屬が、一かたまり數十本の長い莖を抽いて、細かい穂を綴る。よく子供たちが刈り取つても、あそびにする、ざらつきいちごつなぎは、名の通りざら／＼してゐるので、手に握ると、ちよつと木賊トコのやうな感じがする。

鬼芝も、この頃になると、そろ／＼茂つて来る。日本の芝に比べると、一般に荒くて強いやうである。これが茂ると、野べ一體に、丘一面に、まんべんなく青みを帯びて来る。さうして、いつか六月も過ぎ、七月の眞夏になつてしまつてゐる。

かういふ春先から夏へかけての滿洲名物の第一は風塵ふうじんである。實をいふと、風塵は氷の解け始める三月の末頃から始る。陸軍記念日になつてゐる三月十日は、日露戦争の時、奉天會戦で大勝利を博した日であるが、その前日の三月九日は、稀に見る大風塵であつた。南から北へ吹き抜ける風塵は、非常に強烈で、防禦ぼくごの位置に立つたロシア兵は、南に向いて立つてゐることができなかつた。これに反して、日本軍はその風を負つて進撃したので、勢に乗つて敵の中堅を突破し、どこまでも進むことができたといふことである。その三月九日十日頃が、いつでも、南滿洲に風塵の吹き始める頃である。

風塵のことを、この頃は蒙古風もんこふうともいふ。支那では黄塵萬丈わうじんばんぢやうといふ。高く強く吹きたてると、日本の上空に達することも稀ではない。それは、

蒙古の沙漠から吹き飛ばされた砂である。しかし、どの風塵も蒙古から吹き起るものではない。その日の天候によつて、間近い畠や土手の土や砂を飛ばすだけのものもあるし、かなり遠くから吹きたてて来ることもある。暴風強風烈風つむじ風、それ〴〵土砂を吹き飛ばすが、風の種類によつて、趣は皆違ふ。

ほんたうの蒙古風が吹く日には、生暖かくて、どんより曇つた空全體が動いてゐる、ぐんぐんと押し動いてゐる。總べてが眞黄色に見える。砂は非常に細かくても、もちろん黄味がかつてゐる。これを黄沙と呼ぶ人もある。新聞紙を窓の隙間に擴げて置いて、この土砂を集めて見たことがあるが、普通の土砂ではない。

滿洲の建物は、多く二重のガラス戸になつてゐる。おまけに、それに目張りまで施してある。それでゐて、この蒙古風のもち込む土埃つちぼりを防ぐことができない。朝から掃く、拭ふ、絶えず氣を配つてゐても、直ぐに塵だら

けになる。口の中がじやり〴〵する。こんな日には、缺席してゐる生徒の机の上ほどもじめなものはない。隣席の生徒などが時々はらつても、忽ち眞白になつてゐる。

さて、この風塵と芝草との關係であるが、芝草はこの烈風の運んで来る土や埃を堰き止めるしがらみである。吹きたて、吹きたて、吹きつゝのつて来る風も、あの柔かい芝草の葉や株にさはると、折角運んで来た土砂を皆落し、さうして、舞ひ上つて行つてしまふ。だから、芝草のある所に、土砂が堆積する。運動場などを見てゐると、草のない中心部は、強風の吹きつけるたびに土砂をさらはれて、くぼくなる。それに反して、まはりの草の生えてゐる所には、土砂がどん〴〵溜たまつて行く。一春で四、五寸ぐらゐる堆積することは珍しくない。五年、十年とたつ間には、おびたゞしい堆積になる。この堆積が、さまざまの養分を含んでゐるので、また草が繁茂する。

奉天の渾河こんがに近い所には、砂山といふ山がある。學者の研究によると、

その山は、年々北の方へ動いて行くといふ。それは、渾河河畔の土砂が烈しく吹きつけては、丘の北側の所へ堆積するからである。そこには、年々青草が茂り、それがまた土砂を溜める働きをする。

僅か三寸か五寸の離々たる青草があるために、滿洲は沙漠となることを免れ、年々青草を生ひ茂らせるのである。

芝草の中に咲く花で、特に美しいのは翁草である。日本の翁草とは少し違つて、多くは葉が廣い。さうして、早春芝草の間に蕾をもつ。平べつたく地面にくつついてゐるが、ちやんと葉もあり、莖もある。それが、五月の暖かい日光を吸つて、急に大きくなる。全く頸を伸ばさずに、猪頸のまゝで大きな蕾になる。

翁草の花は、咲きぐあひがどこか福壽草の花に似てゐる。しかし、ぱつとその花瓣を擴げると、眞黒いといひたいほど濃い紫の中に、黄金色の藥が守られてゐる姿は、なか／＼見どころがある。

日を経るに従つて、莖も伸び、葉も伸び、全體として立ち上つて来る。花瓣が散つて、白髪の翁らしくなつた頃には、猪頸の代りに、長い／＼莖になつてゐる。

餘り人に知られない草に、十二一重がある。これは日本にもある草ではあるが、枯れ芝の間から、ほんの僅か顔を出して、壓縮された葉の集團の間に、紫の唇形花をちら／＼と綴つてゐる。十二一重とはよくつけたものと感心する。それが、やがてすつくと立ち上ると、もう普通の草花になつてしまふ。

春の終りから夏へかけて、芝草の中に咲く美しい花としては、ねぢあやめだの、あんざんあやめだのがある。「ねぢあやめ」は、滿洲では最も普通の種類で、原つばにも、軒下にも、城壁の上にも、鄭家屯あたりの沙漠の中にも咲いてゐる。「あやめ」に比べると、やゝ小型で、その葉がいつれも二回ほどねぢれてゐるところが違ふ。花は眺めて美しいが、葉は強韌なので、刈り

取つていろいろに使ふさうである。

「あんざんあやめ」は近來の發見で、小型な優しい「あやめ」である。葉はねぢれてをらず、花心に美しいひだがあるので、他のものと區別できる。ぼつぼつ各地で發見されてゐるが、まだ到る所にあるといふほどではない。沙河小櫻草は櫻草に似てゐて、花梗が細かく再分岐してゐるし、花火萼といふのも、長い花梗が、花火の開いたやうに、再分岐してゐる。前者は平野に、後者は丘陵に生ずる。いづれも滿洲の特産であるが、まだ到る所で見うけることのできるものではない。どこかに稀に咲いてゐるのを、植物愛好家がだん／＼見つけて行くのも楽しみである。

僅かばかり萌え出した芝草の上を、牧夫たちは、わが物顔に、羊や山羊や牛などを放牧する。滿洲も、太古は一面の松林であつたといふ。滿洲古來の傳説といふと、皆この松林の中の物語である。しかし、今の滿洲は、どこもかしこも芝山である。芝草の丘である。これは孟子にある牛山の木のやうなもので、あとからあとから牛羊を放牧したために、木の株の芽が伸びることができず、坊主山になつてゐるのであらう。

丘といふ丘、山といふ山、千山とか鳳凰山とかいふやうな山は除いて、どこもかしこも羊や牛の足跡のない所はない。畜類たちは、特に禾本科の植物がすきである。二センチか三センチ、僅かに頸をもたげた芝草をきれいに噛みとつてたべる。

この畜類たちは、かういふ柔かい青草をたべて、ぼろ／＼と糞を落して行く。山羊や羊のは、よく乾いて、少し長めな團栗の形をしてゐる。牛のは、少しべと／＼してゐて、地面に落ちると、平につぶれてゐる。ところが芝原に住む動物で、この糞をきれいに片付けてしまふものがある。それは黄金蟲屬の糞蟲の一種である。糞蟲の中に、「ふんころがし」「大ふんころがし」「だいくこがね」などがある。かれらは、生温かい牛糞が特別すきのやうであるが、どの糞にもたからないことはない。「大ふんころがし」は「ス

カラベサクレ」といつて、古代エジプトでは特に尊んだ蟲で、ナイル河の洪水が止んで、草木が芽を出すと一しよに、地中から出て来て、大きな牛糞をころがす。それを、神様が地球を轉ずるのに比して考へた。ミイラと一しよに、神聖な護符として、この「大ふんころがし」の飾り物が出来てゐる。満洲では、この「大ふんころがし」は夜間に出て来て、牛糞を土中の穴へ持ち込む。随つて、餘り廣く人の目に觸れない。が、普通の「ふんころがし」は、大舉して路傍の牛糞や馬糞にたかつてゐて、人畜が近づくと、唸り聲をたてて逃げ散るので、よく人の目に觸れる。かれらは卵を産みつけるために、小さな糞の玉をこしらへて、二匹共同して運んで、地下の穴へ持ち込む。卵を産みつけられた玉は、一方が尖つて西洋梨のやうな形になる。日數がたつと、幼蟲は、内から糞をたべて急に成長して、やがて親と同じ甲蟲になる。さうして、地上へ脱け出して、また糞をたべて卵を産むのである。牛糞の場合には、口と前肢とで手頃にちぎつて、球にするのであるが、羊糞

や山羊糞の場合には、ちやうど形が適當であるから、そのまま、持つて行つて卵を産みつける。「だいこくこがね」は、よく「大ふんころがし」に似た蟲であるが、新しい糞が落ちてゐると、直ぐそのそばへ深い穴を掘つて、その中へ適當に丸めた糞塊を引き込んで卵を産む。これらの蟲は、支那では、太古から注意を受け、「ふんころがし」は「蜣螂」と記されてゐるが、今では一般に「スカラン(尿蛭螂)」と呼ばれてゐる。「だいこくこがね」はその形から鐵甲將軍などと呼ばれてゐる。この蟲を採集してゐると、滿人たちは、直ぐに「葯(藥)だ、葯だ」と言ふ。つまり、藥にするのだといふ。それほどに、かれらにはよく知られた昆蟲である。かういふ蟲の活動のお蔭で、芝山や山林の汚物は、いつかきれいに掃除されてゐるのである。

芝草の山に咲く花は、草の花ばかりではない。いさゝかの水のある所には、猫柳が花をつけ、丘のはづれ、谷の隅では、榆の木が花をもつ。しかし、これらは花といふには、餘りにちみである。榆の方は、間もなく實になる

と、團扇の眞中に、ぼつんとふくれた所のあるといつたやうな、花瓣に似たものとなつて、折からの風塵に乗つて、あたりに飛散する。

しかし、滿洲の野で花らしい花の咲くのは、庭梅、ゆずり杏などであらう。畠の境界や、屋敷跡と思はれるところへ、或は地べたにはふやうに、或はいさゝかの垣になつて、櫻や梅に似た花が咲く。殊に、ゆずり萼になると、山の麓のしもと原に、一面に生ひ茂つてゐて、一度にばつと咲いて、やがてつぶつぶの小さな實をつける。赤くなると、甘くてうまいことは、内地の萼と同様である。

さういふ花とは違つて、やゝ高い山の端はたや谷の横手に、暖かい日光を受けて咲きにほふ花に、はしどひがある。これは、ライラックの名で呼ばれてゐる種屬で、鬼はしどひといふ種類であらう。紫白など幾種類もあるやうであるが、ちよつとひずみをもつたべつ鱈か甲色かの芽を出すより早く、梢の先に白や紫の細かい花を密生させて、その可憐な唇くちびるから、濃密な芳香ほうかうを春風と共に送る。それは、羊飼ひや牛追ひの牧童たちしか知らない匂ひであらうが、滿洲の初夏を色どる花の壓巻であらう。

(矢澤邦彦ノ文ニ據ル)

四 ビルマ國誕生の日

この日、純絹の日本製ビルマ帽子に純白の上着、燃えるやうなロンジーを着けたバーモウ行政長官は、早朝起床、東天を拜して、遙かに日本への感謝の祈りを捧げて後、招致に應じて、各部長官並びにオンサン少將らを帶同、日本時間十時、河邊陸軍最高指揮官を訪れた。最高指揮官より、ビルマ建國の基礎を築き、かくかく赫々たる成果を挙げた軍政及び行政廢止の布告の傳達を受けるや、バーモウ氏の面は、その重責にさつと引きしまつて、じつと最高指揮官の溫情溢れる訓示に耳を傾け、満身に日本への絶大なる

信頼感を漲らせ、深く國務への挺身を誓つて退出し、こゝに日緬のゆかしい厚情に結ばれた歴史的建國の第一步が進められたのであつた。その名も青年ビルマにふさはしい建國議會は、十一時幕を開いた。

晴の式場には、中央正面に大孔雀旗が飾られ、壇上に金色まばゆき椅子が据ゑられ、傍らには、みづ／＼しい植木鉢が並んでゐる。紅紫黄とりどりのロンジーに装ひを凝らして、全ビルマの民意を受けて立つた建國議員たちが、たゞならぬ緊張を漂はせて着席すると、若々しい「獨立成るの日」の歌が、泉から湧き出たやうに流れる。河邊最高指揮官とバーモウ長官は、日緬要人を従へて、全員起立して迎へる中を入場する。ウバイヨ氏の凜たる開會の聲には、つと緊張する議場最高指揮官以下日本側要人も、この誕生を見守るやうに、靜かに眼を注いだ。バンドラ・ウーセン議員が起つて、嚴然と新ビルマ國の獨立を宣言した。共榮圈の一環として、世界新秩序の創造に寄與すべき、大東亞戰爭下最初の獨立國誕生の一瞬である。

バーモウ氏を始め各議員たちも、身を以つてその重任に應へんとするかのやうに、じつと宣言に聞き入つてゐる。滿場寂として聲を呑み、唯、ニュース映畫班の撮影機の回轉の響きが、耳に入るばかりである。

思へば、永い痛苦の歴史であつた。それは、第一次英緬戰爭以來まさに百十九年、マンダレー王朝が亡びてから五十八年。心なしか、バーモウ氏の瞳にもきらりと露のしづくが光つた。長かつた反英鬭争を顧みて、舊タキン黨の老志士タキン・コドウ・マイン氏も、防衛軍司令官オンサン少將も、唇を嚙んで心の中で忍び泣いてゐるやうであつた。

次いで、バーモウ氏を全會一致、國家代表アビバゴに推戴する旨發表した。その時、一旦控へ室に退いてゐたバーモウ氏は、嵐の如き絶讚の中を、議員たちに誘導されて、一步一步踏みしめる足どりも強く、議場にその姿を現した。ビルマ音楽「スイド」の幽玄なる快音が、世紀の國家代表の前途を限りなく祝福する。全員起立、敬禮を交し、國家代表は壇上に起つて嚴

肅に就任の宣誓を行ふと、みやびた法螺貝が三度響き、銅鑼が鳴り渡る中を、正面にしつらへた金色輝く椅子に着坐した。議場に新たな興奮が起つた。それは、愛國の波しぶきのやうなものであつた。その渦巻は、次第に人々を陶醉させた。委員會の傍聽席に參列してゐたバーモウ國家代表夫人キン・ママ女史も、その反英鬪争を顧み、大東亞戰直前、英官憲に捕らへられた夫君を、女ながら、モゴック監獄から救ひ出した當時に思ひ到つてか、遂にハンケチを眼頭に當てるのだつた。四人の令嬢や次男ボニー君は、「おとうさん」と呼びたげにむず／＼してゐた。バーモウ國家代表は、ちよつと眼をつむつた。脱獄してから、日本軍に救出されたあの日の感激、一年前の八月一日、戰火なま／＼しい中に、行政府を組織した辛苦の思ひ出、それらがこも／＼去來するの、か、胸間に飾られた榮の勳一等旭日大綬章が、かすかにふるへるのを見た。

十四時には、もう新内閣の組織と樞密院の編成に移つた。バーモウ國

家代表は總理大臣の重責をも兼任し、總理は副總理以下の新閣僚を任命した。どの閣僚の面も、いひ知れぬ興奮に紅潮、さび／＼した建國調の進行の中に選ばれた新閣僚たちは、國家代表の前に堵列して、辭令を受け、宣誓を行ふ。次いで、ビルマ建國に功勞のあつたタキン・コドウ・マイン氏が樞密院議長に就任し、各顧問の就任式を行ひ、終つて、日緬同盟條約の審議にはいつた。八紘爲宇の大精神に抱擁された、永遠に變ることなき日緬の友好關係は、淀みなく實を結んで通過をみた。

ほつとしたバーモウ國家代表以下政府要人は、こゝで休憩、各自手辨當て晝食をとつたのも、ゆかしい決戰下の心意氣を示してゐた。十六時、積年の宿敵、米英への宣戰布告が行はれた。バーモウ國家代表やタキン・ミヤ副總理、オンサン國防大臣の少し蒼く引きしまつた顔、そこに不退轉の決意がほのめいてゐる。仇敵英國に對し、ビルマ民衆が百年の血を賭けて抱き續けた果し狀が、今、發せられたのだ。斷じて退くまいぞ。炬火の

やうな總べての感情が飛瀑となつて奔騰し始めたのである。

次いで別室で、十七時に調印式が行はれた。澤田特命全權大使は、隨員を従へて入場、バーモウ總理と禮を交し、中央大テーブルを隔てて着席、條約書にインキの色も鮮やかに署名した。條約成立だ。兩國代表はペンを擱くと、待ちかねたやうに「ありがたう。」と堅い握手を交し、流れるやうな君が代と新ビルマ國歌の洪水の中を、盃を舉げて、日緬兩國の美しい友情の前途を祝福し、こゝに條約調印式は終つた。

かくして、ビルマと日本は全く一心同體、大東亞戰爭完勝への逞しい一歩を踏み出した。日緬親善の香り高き夜に入つて、ひた／＼と迫る暗黒の夜氣の中を、二十一時、バーモウ國家代表主催のさゝやかな祝賀式が催された。河邊最高指揮官澤田大使始め、日緬兩國要人は、盃を舉げて日本とビルマの不變の友情のために乾盃し、こゝに歴史的な建國式典を終つた。

この日の喜びの知らせは、町から村へ、村から山へと、瞬く間に傳はつた。ラングーンの街の角々に群がる人波は、放送されるバーモウ國家代表の言葉を聞き洩らすまいと、互の手を握りしめ、しばし胸塞がるばかりの光景が続く。折から、低空を飛來した日本機から、水色と薄桃色の獨立祝賀傳單が撒かれ、「日本・ビルマ萬歲」を連呼する若々しい聲が、どつと揚つた。

昭和十八年十二月二十七日印刷
昭和十八年十二月三十一日發行
昭和十八年十二月三十一日翻刻印刷
昭和十九年四月二十日翻刻發行

著作權所有

著者兼
發行所

文部省

中等國文 三

定價金四十三錢

翻刻者

東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

印刷者

東京都牛込區市谷加賀町一ノ二
大日本印刷株式會社
(東京) 青木弘

昭和十九年四月二十日
文部省檢査日



發行所

中等學校教科書株式會社

教科書番號 11ノ3

